

平安時代の連語の分布

東 辻 保 和

(文理学部国語学国文学研究室)

On a distribution of the frequently connected word-group in Heian period

Yasukazu HIGASHITSUJI

はじめに

1. 小稿は、国語の語彙に占める「もの」「こと」の位置についての研究の一環をなす。

2. 「連語」の概念は、国語学辞典に「二つ以上の単語が連結して、単語よりも複雑な一まとまりの観念を表わし、しかも、まだ文をなすに至らないもの。(中略)二つ以上の単語の結合でも、一単語なみの形態・機能を持つものは、複合語または熟語と呼ばれ、連語と区別される。」とあるのに依る。

3. 小稿に取扱う連語は、具体的には、「ものの聞え」「ものの煩ひ」「ことの心」「ことの理」などの如く、連体格助詞「の」を介して、「もの」「こと」と体言とが連結せられたものである。この種の多くは、複合語と認定することの困難なものである。しかしながら、複合語ではないと断定することもむずかしい。そこで、しばらく、「連語」という概念のもとに、これらの連結形態をすべて包含することとした。

4. 「ものの～」「ことの～」が、互に比較研究の対象たり得ると考えたのは、次の理由による。一つは、「ものの心」「ことの心」、「ものの聞え」「ことの聞え」などの如く、連語の後項(「ものの」「ことの」に後接する要素をこのように称する。)に、同じ形態の来る例が多数あることである。二つは、「もの」「こと」という、日本語の構造上その骨組みをなすと考えられる語彙の間にも、たとえば、今昔物語集では、「若シ問フ事有テ『此レハ何物ノ』ト、問ハ、汝ヲ答テ可云シ『此レハ仏ノ形像也、王位ヲ捨テ正覚ヲ成給ヘリキ』ト、(卷一、二二 98-13~14)」という例があり、「伝承・書写のあやまりはとどまるところをしらず、まれには物と事を混用するむきもある(もっともこれは人と事との混用ととれないこともない)」と解説されている⁽¹⁾。訓点資料にも「朕。学浅(ク)。心拙(ク)シテ物ニ在(リ)テ猶(シ)迷(ヒ)ヌ。」のように、「物」を「コト」と訓じた例のあることが、築島^{コト}裕博士によって指摘されている⁽²⁾。又、森田武博士の御教示によれば⁽³⁾、「アマリキラフ物ヲスル程ニ我モ罪セラレタソ」(両足院本蒙求抄上の下)、「洪範といふ事をつたへ給へり。洪範といふは……といふ事をするしたる物の本なり。」(清水物語下)、「然レバサント持チ給ウ程ノ事ヲ沽却シテソノ価ヲ住持ニ進ゼラルレドモ」(サントスの御作業一)の如き通用例のあることを知るのであって、この両語が相通じ合う条件にあるらしいと考えられること、以上の二点である。

5. 考察すべきことがらは、もとより多いが、小稿では、両連語の平安時代の各種国語資料における分布を調査することに主眼を置き、語義・用法に関しては、殆ど触れるところが無い。共時論であるようにつとめた。

第一節 調査の対象とした資料

管見の資料は、次の範囲にとどまる⁽⁴⁾。

竹取物語総索引(山田忠雄), 土左日記総索引(日本大学国文研究室), 蜻蛉日記総索引(伊牟田経久), 平中物語総索引所収本文(曾田文雄), 後撰和歌集総索引(大阪女子大学国文研究室), 更級日記総索引所収本文(塚原鉄雄ほか), 和泉式部日記総索引所収本文(塚原鉄雄ほか), 伊勢物語に就きての研究(池田亀鑑), 宇津保物語(古典文庫本), 対校源氏物語新釈(吉沢義則), 枕冊子(田中重太郎, 日本古典全書), 紫式部日記(池田亀鑑), 讃岐典侍日記(玉井幸助, 日本古典全書), 古本説話集(川口久雄, 日本古典全書), 八代集抄(山岸徳平), 大和物語, 落窪物語, 夜の寝覚, 浜松中納言物語, 狭衣物語, 大鏡, 栄花物語, 堤中納言物語, 今昔物語集(以上, 日本古典文学大系), 打聞集(古典保存会複製), 百座法談聞書抄(佐藤亮雄・重版), 真福寺本将門記(古典保存会複製), 貞信公記, 九曆, 御堂関白記, 小右記(既刊三冊), 殿曆(既刊三冊)(以上, 大日本古記録), 中右記, 左経記(以上, 史料大成), 訓点語と訓点資料(第一輯~第三十九輯, 別刊を含む。訓資と略称する。)所収の翻刻・訳文, 西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究(春日政治, 最研と略称する。), 古点本の国語学的研究訳文篇(中田祝夫, 点研と略称する。), 興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究訳文篇(築島裕, 慈研と略称する。), 訓点資料の研究(大坪併治, 訓研と略称する。), 西大寺本不空羂索神呪心経寛徳点(小林芳規, 『国語学』33集所収, 神呪心経と略称する。)

第二節 和文資料と和化漢文資料との比較

厳密には文体を異にする, 今昔物語集・打聞集・百座法談聞書抄(法華百座と略称する。)をも, かな書き資料として, 便宜上こゝに編入考察することとする。

1. 用例数一覧表(小稿末尾に別表として添付した。)
2. 概括的に言えば, 上の表に見るごとく, 和文・和化漢文資料ともに, 「物の〜」「事の〜」

	和 文	和 化 漢 文
物 の 〜	139	37
事 の 〜	55	52

の用例を多数有している。しかしながら, 今それぞれの異語数(異連語数というべきであろうが, しばらくこのように称しておく。)を比較してみると, 左のとおりである。

このように, 和文資料では, 「物の〜」が「事の〜」の約2.5倍の多数を示すのに対して, 和化漢文資料では, 逆に「事の〜」の方が優勢であることを示していて, この両資料間には, 使用分布に相違のあることを予測せしめる。この傾向は, 作品毎にも概ね看取し得るところである。

<和文資料>

	物 の 〜	事 の 〜		物 の 〜	事 の 〜
伊 勢 物 語	1	1	浜松中納言物語	20	5
大 和 物 語	8	2	狭 衣 物 語	14	3
平 中 物 語	5	2	栄 花 物 語	26	15
竹 取 物 語	1	0	大 鏡	12	2
宇 津 保 物 語	48	14	枕 冊 子	23	2
落 窪 物 語	12	3	土 左 日 記	1	2 [△]
源 氏 物 語	79	24	蜻 蛉 日 記	9	5
夜 の 寝 覚	13	5	和 泉 式 部 日 記	1	0

紫式部日記	13	1	金葉集	1	1
更級日記	3	2	詞花集	0	0
讃岐典侍日記	3	5△	千載集	0	1△
堤中納言物語	5	1	新古今集	2	1
古今集	1	1	今昔物語集	23	17
後撰集	2	2	古本説話集	3	4△
拾遺集	1	0	百座法談聞書抄	2	1
後拾遺集	2	1	打聞集	0	2△

△印を付したものは、「事の～」の数の方が多いのであるが、いずれも、用例数の少ない作品に見るところである。

<和化漢文資料>

	物	～	事	～		物	～	事	～
貞信公記	3		1△		小右記	16		23	
殿暦	6		13		中右記	6		27	
九暦	6		8		左経記	10		19	
御堂関白記	11		15		将門記	4		1△	

△印を付したものは、「物～」の方が多数を占める資料である。

こゝで取り上げておかねばならない問題に、とくに和化漢文資料における「物～」「事～」の読みかたがある。事実、それらの多くは、モノノ～・コトノ～の如く訓読していたのか、あるいは、音読していたのか明らかでない。殊に、漢語であることの明らかな「物色」「物議」「物主」「事由」「事故」「事情」「事略」「事実」(いずれも中華書局版『辞海』による。)などの場合は問題である。しかしながら、一方では、「事之案内」「事之起」「事之根元」「事之最初」「事之子細」「事之體」「事之次」「事之外」「事之故」「事之由」など、コトノ～と訓んだと推定し得る用例があり、又、稍々時代が降るが、高山寺藏消息文範には、「事ノ情」(428)、「事ノ愁」(113)、「事ノ由」(88)など、その明証も得られる。更に訓点資料にも、「事の近遠」(小川本願経四分律古点乙卷72-12, 訓資9)「事の実」(大唐西域記卷三, 点研訳文篇553-21)、「事の證」(法華義疏序品末, 点研訳文篇410-10)、「事ノ隙」(興福寺本大慈恩寺三藏法師伝古点卷七, 慈研訳文篇243-1)、「物の疑(ひ)」(法華義疏方便品末, 点研訳文篇489-22)、「物ノ感」(興福寺本大慈恩寺三藏法師伝古点卷十, 慈研370-3)、「物ノ主」(同上卷五, 慈研訳文篇159-8)、「物の心」(法華義疏序品末, 点研訳文篇410-5)、「物の議」(大唐西域記卷三, 点研訳文篇553-18)などの用例があるのであって、従って、すべての「物～」「事～」が訓読せられたかどうかは明らかでないとしても、かなりのものが訓読せられたと推定して差支えないであろう。そこで、小稿では、以上に挙げた連語をすべて、訓読の可能性を有するものとして考察の対象とする。

3. 「物の～」「事の～」共に、連語によっては複数作品に使用されていると認められるものと、ある一作品にのみ使用されていると認められるものとのあることは、別表から読み取ることができる。そこで、本項では、まず複数作品に使用されている連語について、両資料間の比較を試みることにしたい。

まず、二作品以上に使用されている連語を列举してみる。

＜和文資料＞（数字は作品数を示す）

物のけ	14	物の隠れ	〃	物のはち	〃	事のほか	15
物のあはれ	12	物の聞え	〃	物の恥かしさ	〃	事のさま	10
物の具	11	物の声	〃	物の隙	〃	事のついで	8
物の心	〃	物の中	〃	物の姫君	〃	事の有様	7
物の故	9	物のはえ	〃	物の程	〃	事の心	7
物の音	8	物のあやめ	3	物のまぎれ	〃	事の始め	5
物のさま	7	物の香	〃	物の報い	〃	事の由	〃
物の色	6	物のかず	〃	物の用	〃	事の聞え	4
物の上手	〃	物の上	〃	物の命	2	事の趣	3
物のふ	〃	物の滑ら	〃	物のたとひ	〃	事の作法	〃
物の蓋	〃	物の色合	〃	物の罪	〃	事の筋	〃
物の折	〃	物のかた	〃	物の名	〃	事のまぎれ	〃
物のうしろ	5	物の帷子	〃	物の葉	〃	事の折	〃
物の興	〃	物のくさはひ	〃	物の筋	〃	事のあるやう	2
物の気色	〃	物のけはひ	〃	物の隔て	〃	事の数	〃
物のさとし	〃	物の師	〃	物の変化	〃	事の沙汰	〃
物のたより	〃	物の調べ	〃	物のやう	〃	事の譬ひ	〃
物のついで	〃	物の筋	〃	物のゆかり	〃	事の中	〃
物のはざま	〃	物のそば	〃	物の例	〃	事の節	〃
物の枝	4	物の隈	〃	物の絵様	〃	事の煩ひ	〃
物のおぼえ	〃	物の底	〃	物の折節	〃		

＜和化漢文資料＞

物気（性）	7	事之次（事次）	6	事障	〃	事之起（事起）	〃
物名	5	事趣	5	事體	〃	事之子細	〃
物節	〃	事故	〃	事憚	〃	事次第	〃
物具	〃	事煩	〃	事旨	〃	事之実（事実）	〃
物数（員）	〃	事疑	4	事有様	2	事始（初）	〃
物（者）声	4	事理	〃	事忌	〃	事便	〃
物誤	2	事定	3	事憂（愁）	〃		
物興	〃	事恐（怖）	〃	事縁	〃		
事之由（事由）	8	事心（意・情）	〃	事儀	〃		

3. 1

物のけ 和文・和化漢文資料ともに、第一位が「物のけ」であることは興味深い。管見の古記録類のすべてに認められる。

中興の近江の介がむすめ物のけにわづらひて（大和284—14） 大将殿の宮あこ君、ものけつきて、いたくわづらふ（宇津保吹上下565—4） 物怪、生霊などいふもの多く出で来て（源氏葵337—14） つねの御物怪に、例ならずおはします（夜の寝覚100—6） かく例ならずおはしますに、御物のけなどにや（浜松409—3） 御物の怪にや（狭衣146—10） 東宮いとうたてき御ものけにて（栄花巻—37—1） 冷泉院の御ものけなどのおもはせたまつるなり（大鏡巻二101—4） 験者のもの怪調ずとて（枕冊子98—9） 物怪にやあらん（蜻蛉上43—11） ものけに引き倒されて（紫式部日記128—7） 御ものけあらはれて（讃岐典侍129—9） 物、気現レテ、靈験掲焉、事共有リ（今昔巻十九56—2）

今日ものけを渡（殿暦^{長治三}九^{治三}十八） 御惱（胸イ）物気云々（左経記^{長治三}四^{治三}十七） 頃月宅内物性類示（九

条殿記^{平三・十} 依天変物恠所行也(貞信公記^{平二八}) 去九日多武物恠令占申(御堂関白記^{長三・四})
終宵風雨無極似物恠(小右記^{永三九}) 主上御中宮御方間有大地震, 是大物恠歟(中右記^{長二})
物の具 ついで, 「物の具・物具」が双方に多く用いられている。

家も焼けほろび物の具もみなとられはてて(大和297-4) ものゝぐなど, ありがたくきよりに
する所にこそあれ(宇津保蔵開下 1169-8) 物の具, 餅など召すは(落窪巻-69-16) 数珠物
の具はありながら(浜松350-16) 御しつらひ, 物の具, 調度なども(狭衣巻四 411-11) はか
なき御ものゝ具どもは(栄花巻四 131-6) 御物の具どもはこび(枕冊子177-15) あけくれ取
り使ひし物の具なども(蜻蛉上 51-9) 昼の御座の御物具のわたりさぶらふなりけり(讃岐典侍
148-1) 万、物、具、腹帯・手綱・鞆等(今昔巻五 374-15) 男思ひはなれて, 物の具などは
こび侍ければ(後拾遺集卷十六 929詞書)

今日以侍鞍并物具等送右大弁許(殿曆^{長四}) 但手振物具等相具参入云々(小右記^{長三十五})
可然物具等借用家(御堂関白記^{長四}) 又供神物具了哉如何(中右記^{長二}) 粧馬忽揚突物具
皆破損(左経記^{長三}) 殊に, 源氏物語に一例も見当たらないこと, 中右記に格別多数の用例の見
られることに注目せられる。なお, 『今昔物語集 二』(古典文学大系)補注(427頁)に, 「この
語は, 後世の軍記物語においては, 専ら, 鎧を指すことになるが, 本冊における, 共通の意味は,
道具ということであろう。」と解説されているのが通用する。

物の興 和文資料では, 次の五作品に見かける。

天下のものゝけうも, ひとりみるにはかいなきことなり(宇津保吹上上 480-4) 物の興せち
なる程に, お前に皆御ことども参れり(源氏藤裏葉 271-10) 物の興もなく, いとほしき事をお
もほす(落窪巻三 178-11) 頭痛く思ふに, 物の興覚えず苦しきに(栄花巻十七 70-13) 雪降
り荒れまどふに, 物の興もなく(更級日記14-1)

和化漢文資料では, 次の二例を見る。

今日有物興, 仍給信乃布二端(小右記^{長二六}) 院還御, 今日有殿上一種物興云々(中右記^{長三})
物のかず 和化漢文資料で過半数の五作品に見られる「物数・物員」は, 和文資料では, 四作品
にしか見られない。たゞ, この連語に関しては, その用法に注目すべきものがある。即ち, 和文資
料では,

いでや, それは物の数にもあらず, 落窪の君のちようぜられ給ひし様は, いといみじかりき。
(落窪巻三 182-12) 斯かる御中らひに, いかで東の御方, さる物のかずにて立ち並び給ひつら
む。たとしへなかりけりや。あないとほし。と覚ゆ(源氏野分 106-11) 物の数にもあらぬ里人
さへ, よろづにともせば山に入らむとまうけをし(栄花巻五 162-3) ものゝ数にもあらぬ上達
部の御供の男ども, 隨身・宮の下部など(栄花巻八 264-13) これは何のものゝ数にもあらぬあ
やしの賤の男さへ(栄花巻二十六 209-12) いかで御身にかゝるものゝ数にもあらぬ身を替り奉ら
ん(栄花巻三十 327-7) のごとくに, その多くが比較(取り立てる程のものゝ意)を表わす一
種の慣用的用法である。ただし, 栄花物語の一例と今昔物語集の三例はそれとは異り, 物の数量を
表わすのに用いられている。

ものゝ数書きたる文, 柳宮に入れて参れり。(栄花巻八 266-3) 其、銭、代、返、貴、ル、理、レ、
ド、モ、可、返、キ、物、員、極、テ、多、カ、レ、惜、シ、ク、思、エ、テ、難、返、キ、也(今昔巻二 189-2) 善通, 常、市、行、テ、価、
為、ル、間、輒、ク、其、徳、自、然、有、テ、漸、ク、其、物、員、多、ク、シ、テ、既、ニ、千、万、許、ニ、成、ヌ(今昔巻九 253-3)
《ほかに, 卷二188-10》今昔物語集には, この種の用例のみである。

一方, 和化漢文資料, 就中, 古記録では,

但馬守道順朝臣送絹廿疋俸料代者物数過差是五節也(小右記^{長三五}) 院御頓給宣下右大臣奏前

例物数即下酉時除目儀初（御堂関白記^{皇和五平五}）本自奉此事之人經頼也相逢彼儀定物数（左経記^{長元四七}）物員前日示含了（同上^{長元三十九}）但於書入物員（同上^{長元三}）捧物今夜雖可分給僧侶，臨夜陰不弃物数，早旦以槌使各可送房々歟（中右記^{平永福}）に見るごとく，すべて物の数量を表わす意に用いられていることを知る。これは，文学作品と古記録という資料の性格に因るのかも知れない。が，今昔物語集の用例と一致する点で注目せられる。和化漢文資料でも，将門記に於て，

故不_レ屑_二学業之輩_一（500）の「不屑」が裏書にモノカズナラスとあるのは，和文資料の用例に合致している。たゞし，モノ、カズナラズでなくて，モノカズナラズであることについては，平井秀文氏が「承德本将門記の訓点」（『国語国文』5—10）で触れられた。又，春日政治博士は，「古訓雑記」（『古訓点の研究』所収）で，モノカズの方がモノ、カズよりも古形らしいと述べられ，聖語藏地藏十輪経正暦点（992年）にモノカズナリの例のあることを示しておられる。なお，訓点資料の用例については，後に触れるところがある。

物の節 和化漢文資料で同じく過半数の五作品に見られる「物節」は，和文資料では，僅かに二作品にしか見られない。

ものゝふし・とねりもこのろくたまふべきぬのゝ事などさだめたまふ（宇津保 嵯峨院 338—5）
近衛づかさの名高き舎人・物の節どもなどさぶらふに（源氏松風 226—13）

物節以下候於帳下（九暦逸文^{天長四三}）定宮所々物節・別当等（貞信公記^{長元三三}）随身近衛二人被捕物節（小右記^{平永福}）東左近庭北上座儲二列物節以下座（御堂関白記^{長元三十九}）物節以下各一了事上下退出（左経記^{平永三}）

この傾向も，前述の「物数」と同じく，宮廷社会での行事・事件の記録を主とした男性日記の性格に因るのであろうか。

物の声 和化漢文・和文資料ともに，四作品に使用されている。

かくて御あそび，よろづのものゝこゑかきあはせてあそぶときに（宇津保内侍督 732—3）覚えぬ所にて聞き始めたりしに，珍らしき，物の声かなとなむ覚えしかど（源氏若菜下 41—2）近うてはなつかしからぬものゝ声なり（更級日記 29—10）夜入外極怖気ムメク物音有り（今昔卷三十一 278—4）

皆々着座，一献^{調音}，二献^{調音}，三献^{調音}，此間歌人発物聲（中右記^{長元三三}）去比天井有者聲仍上下人見之（殿暦^{長元三十九}）於堂南発物聲（御堂関白記^{長元三十九}）幔外発物聲（左経記^{長元三}）

物の名 和化漢文資料には大半の五作品に用いられ，和文資料では二作品に見られる。

むかしすき物ともあつまりてもものなをよみけるに（伊勢物語 323—1，小式部内侍本）牛頭梅檀とかや，おどろおどろしきもの名なれど（源氏東屋 36—4）

国司以下称物名（殿暦^{長元三十九}）各称物名（左経記^{平永三}）但不待問而称物名者（九暦逸文^{天長四三}）内大臣問之次第唱物名（小右記^{長元三}）一々称物名各退出（御堂関白記^{長元三十九}）

「物の名」が和文資料では，和歌集の部立の一つとして用いられていることは言うまでもないが，それ以外には余り用いられていない。他方，古記録では，宮廷の諸行事の記録という性格上，文字通り物の名称の意味で，多くの資料に用いられているのであろう。

物のかた 和文資料では，次の二作品に見られる。

かくらうある物かた，おかしきものさまなどかいつけて，いとよのつねならず（宇津保内侍督 866—9）さまさまの果物を皆ものかたに盛りなどして参らせたるなりけり，（采花卷十六 48—6）これに関連して，今昔物語集に見られる次下の「物，形」および「物，躰」（大系本に，カタチとルビが付けてある。）にも触れておかねばならない。地引_二，三尺許_一，少宝塔_ヲ掘出_リ，物_ノ躰_ヲ見_ル，此_ノ世_ノ物_ニ不_レ似_ス。（卷十一 113—15）左衛門，府生掃守，在上_ト云_フ高名_ノ絵師

有リ、物ノ形ヲ写ス、少シ違フ事无カリケリ。(卷二十五367—11) 然レハ此ル物ノ気ハ様々ノ物ノ形ト現ヅテ有ル也ケリ。(卷二十七503—7) 「かた」と「かたち」との語義の違いは、『時代別国語大辞典上代篇』によると、次のようである。

「カタが、単なる物の外形を表わすのに対し、カタチは人間の姿や容貌に関して用いられることが多い」(同書193頁〔考〕) ただ、この区別が、あくまで厳重に守られていたかは疑わしい。今、その読み方を度外視して挙げれば、和化漢文資料にも、次の二例がある。

以金銀宝為物形(御堂関白記^{寛弘元・三十一}) 白昼可令僧俗見物體(左経記^{長元八・三十五})

3. 2 次いで、「事の～」の考察に移りたい。

事のついで 両資料を通じて多くの作品に用いられているものは、「事のついで」ぐらいのもの(和文8, 和化漢文6)である。しかし、それとて「物のけ」の多用ぶりには及ばない。

こと^ノのついでありて人の奏しければ(大和322—10) いまこと^ノのついで^ニあらば、「かくなん」とかたらひきこえん(宇津保嵯峨院307—2) 今しも事^ノのついで^ニに思ひいでたるやうに(源氏横笛191—11) 事^ノのついで^ニごとには、今はたゞ姫君の御事をのみなん思とこそ侍めれ(栄花卷二十六232—1) こと^ノのついで^ニに「殿にものし給ふなる姫君は…」ととひけり(蜻蛉下216—13) 事^ノ次^ニテ、已^ガガド申^{サフツヒ}候^シヲ(今昔卷二十六455—13) あいなき事^ノのついで^ニをも聞えさせてけるかな(堤中納言このついで373—14) こと^ノのついで^ニ侍て(後撰集卷十五1078詞書)

而陪従一両申所勞不參、以事次奏処、勅云(殿曆^{長和五・三十一}) 頃之申賭弓雨儀、事之次被仰云(左経記^{長元九}) 後日有事次之時、密々尋申上云(中右記^{長和五}) 依有事次、問天皇習弓儀(九曆記^{天徳元・三十四}) 昨日有事次申穢事於左府(小右記^{長和五}) 奇思間有事次同之也(御堂関白記^{長和五})

事の有様 和文資料では七作品に、和化漢文資料では二作品に見られる。

めして、こと^ノのありさまとはせ給ふ。(宇津保俊隆25—8) 事^ノの有様は、くはしく取り申しつ(源氏夢浮橋320—1) 人の御程、事^ノの有様など思さん(狭衣卷二167—10) げにさもありぬべき御事^ノの有様なるや(栄花卷八267—15) 御導師、事^ノのありさま申して水かく。(讃岐典侍168—4) 宮ニ返テ具ニ事^ノの有様ヲ申スニ(今昔卷一65—4) 生タル物ナリケリトミナシテ事^ノノアリサマヲ問(打聞集177)

若可參否者、従兼依可參、即參入、事有様如先日、有御樂事(御堂関白記^{寛弘元・三十六}) 即率上達部被帰參、右府令申事有様於給(左経記^{長和五})

ところで、コトノアルヤウという形態が、次の通り二例見受けられる。

こと^ノの^{ある}やう、ありし事など、もろともに見ける人なれば(平中25—20) 左衛門佐、こと^ノの^{ある}やう^をくはしくきこえ給。(宇津保沖つ白浪892—9) 前者は、過去の「ありし事」と対比させるために、現在の様態を「ことのあるやう」で表現したものと理解されるのであるが、後者では、「こと^ノのありさま」との間にかなる意義の違いがあるのか、明らかでない。

事の心 和文七資料、和化漢文三資料に見られる。

涙おちて、事^ノの心^をしへたてまつり給。(宇津保楼の上下1801—11) 注。九大本系の玉琴本は、「琴をしへさし給テ」となっている。(5) 講師の、いと尊く事^ノの心^を申して(源氏鈴虫196—14) こと^ノの心^をとくを^とこもじに、さまをかきいだして(土左20—5) こと^ノの心^を違ひてもあるかな(紫式部日記202—1) 今ハ此ニ依テ事^ノの心^ヲ思フニ、老タルヲ可貴キニコソ有ケレ(今昔卷五402—10) こと^ノの心^をえたらん人は(古今序) 國王此大師ニアヒテ事^ノの心^ヲ問給(打聞集156)

慥不知先例、但推案事心、為近衛将之人、何不副御輿(左経記^{長元五}) 但案事意兩方宣旨共到使庁(同上^{長元七}) 案事情御書新帝所書給歟(同上^{長元七}) 今案事情、准尋常節会(九条殿記

天^五月^七・) 倩思事情, 若是欲生天上之中有位歟(中右記^{天^九元^三}・).

なお、伊勢物語神宮文庫本には、次の用例もある。

おほやけのみやつかへしければつねにはえまうてすされとも事のこゝろ(他本もとの心)をうしなはて(補遺篇広本)

和文における「物の心」「事の心」の語義・用法については、先に拙考を発表した⁽⁶⁾。和化漢文資料の「事心」「事情」「事意」をすべてコトノコ、ロと訓んでよいものか疑問があるが、管見の限りでは、九曆の四例中の一例が、「今尋事情……」(九条殿記^{天^九元^三})とある以外、引用例からもその一端を知ることく、すべて、「案——」あるいは「思——」という一種の慣用的句法のもとに用いられており、いずれも、同義語として、又、コトノコ、ロという訓読みとして使用されたと考えることが可能であろう。

事の由 「事之由(事由)」は、和化漢文資料では、全八資料に見える。かつ、その用例数においても、別表IVに見ることく他に比して、圧倒的な多数を示している。それに比して和文では、五作品(宇津保9, 栄花・今昔各7, 源氏・蜻蛉日記各1)に見えるに過ぎない。

同きのかげにすへて、ことのよしをくはしくとひ給(宇津保俊陸16-6) 御葬送の事は、殿に事の由申させ給ひて(源氏蜻蛉173-1) 事の由奏して出でさせ給ふ程、いみじくめでたし。(栄花巻-55-4) 仏にことのよし申し給へ。例の作法なる。(蜻蛉日記中153-10) 他国ヨリ参レル比丘、門ノ外ニシテ事ノ由ヲ申サズ(今昔巻四309-16)

為房朝臣申事之由, 次各見了, 次弁別当(殿曆^{天^九元^三}・) 仍申事之由於関白殿(左経記^{天^九元^三}・) 遅々奏聞事由(九曆抄^{天^九元^三}・) 令奏事由(貞信公記^{天^九元^三}・) 仍左大弁示事之由令把笏(小右記^{天^九元^三}・) 令中宮大夫被申事之由(中右記^{天^九元^三}・) 以齐信朝臣被申事由後, 於中門從御興下給(御堂関白記^{天^九元^三}・) 具陳事ノ由(将門記181) なお、故藤原照等博士編著『記録古文書語彙抄 上巻』によると、以上のほか、三代格・石清水文書にも見える由である。

「事の由」の用法は、限定されている。詳細は稿を改めねばならないが、和文・和化漢文資料を通じて、大勢は、「申・奏・啓」「聞ゆ」および「問ひ給ふ」などの語と共に用いられており、下位者が上申・奏上ないしは、上位者が下問する場面に限られている。たゞ、今昔物語集の次の一例は異なる。

磐嶋、此レヲ見テ、即テ大安寺ノ南塔院ニ行テ、沙弥仁耀ヲ請ツテ、事ノ由ヲ委シテ語テ、金剛般若経ヲ令読誦テ、彼鬼ノ為ニ廻向ス(巻二十181-8)

「事由(事之由)」は、かゝる限定せられた用法を有するものである故に、殊に古記録類に頻用されたものと考えられる。

事の趣 和化漢文では過半数の五資料に用例が見えるが、和文資料では、三作品に見られるに過ぎない。

啓白うちして、事の趣申て、願文少しうち読みて(栄花巻十六45-4) 鐘うちならして、事の趣申しあきらめ給ふ。(讃岐典侍133-5) 能尊王、此ノ鳩摩羅焰ニ値テ、事ノ趣キヲ問ヒ給フ(今昔巻六63-6)

召法家被問事趣(殿曆^{天^九元^三}・) 納地蔣螺鈿宮、事趣詳御願文(左経記^{天^九元^三}・) 殿下執申事趣(九条殿記私記^{天^九元^三}・) 事趣在先日記(小右記^{天^九元^三}・) 事趣雖多大概如此(中右記^{天^九元^三}・)

事の煩ひ 和化漢文では五資料に15例見えるが、和文資料では、源氏物語・栄花物語に各一例見られるに過ぎない。

御賀の事、おほやけにも聞召し過ぐさず、世の中の営みにて、かねてより響くを、事の煩ひ多くいかめしき事は昔より好み給はぬ御心にて、皆かへさひ申し給ふ(源氏若葉上307-9) いと便な

き事なり。事の煩ひあり。はやう西殿へ渡らせ給ね(栄花卷三十322-2) 有事煩、此日禄有綿無網(九曆抄^{平二二二}) 然而依有事煩相定只給禄(小右記^{皇和五}) 公用間致事煩、仍諸国一同待参期可見上(御堂関白記^{皇和五}) 夜降雨殊甚、舞姬上下之間、事煩尤多(左経記^{平二四二}) 須出河原也、依有事煩年来只於家中行被也(中右記^{皇承三})

以上の、「事の由」「事の趣」「事の煩ひ」は、いずれも、和化漢文資料の多くに見出されるが、反面、和文資料では、ごく限られている。そのような状況のもとにあって、栄花物語には、この三種の連語がすべて用いられている点で注目される。

4. 本項では、一方の資料では複数作品に用いられているのに対して、他方では、一作品にのみ見られる連語について、考察しようと思う。そこでまず、一作品にのみ見られる連語を作品別に列記してみると次のごとくである。

<和文資料>

大和物語 物のあるやう	事のつて
宇津保物語 物のうへ・物の思ひ出で・物の限り・物のかため・物の苦しさ・物の祟り・物のつきつき・物の費え・物のひかり・物のまかなひ・物のわづらひ	事の限り・事の妨げ・事の道理・事のたばかり
落窪物語 物の積	
源氏物語 物のあなた・物のあやまち・物のありさま・物の案内・物の色々・物の奥・物のおほひ・物の面白さ・物の親・物のくさ・物の心苦しさ・物の心ばへ・物の妨げ・物のしたかた・物のたがひめ・物のためし・物の伝へ伝へ・物の滞り・物のなさけ・物のねがら・物のはええしさ・物のはし・物のみやび・物のむすめ・物の折々	事の誤り・事の忌・事の恨めしさ・事の気色・事の騒ぎ・事の繁さ・事のたがひめ・事の閉ぢめ・事のなさけ・事の深さ浅さ・事の乱れ
夜の寢覚 物の穴・物の恨めしさ	
浜松中納言物語 物の悲しさ・物の木・物のたぐひ・物の歎かしさ・物のゆくへ	事の報い・事の旨
狭衣物語	事の咎
栄花物語 物の因果・物の恐しさゆゑしさ・物の集	事の掟・事の便り・事のはえ・事の催し・事のやう
大鏡 物の頭・物のをかしさ	
枕冊子 物のいとほしさ・物のいらへ・物の大きさ・物の下部・物のて・物のめでたさ	
蜻蛉日記 物のさき・物のしりへ・物のたすけ	
紫式部日記 物のかたがた・物のけじめ・物のよすが	
今昔物語集 物ノ足音・物ノ要・物ノ恩・物ノ形(躰)・物ノ沙汰・物ノ精・物ノ靈・物ノ王	事ノ諍・事ノ縁・事ノ発・事ノ理・事ノ根元・事ノ定メ・事ノ次第・事ノ本・事ノ折節
古本説話集 物ノ欲シサ・物ノ肉・物ノ跡	
法華百座	事ノハダカリ
後撰和歌集	事の言ふ甲斐

＜和化漢文資料＞

貞信公記 物疑	
殿曆 物香・物手本	事様・事後・事程
九曆 物危・物煩	
小右記 物勢・物色・物聞・物要・物解文・物沙汰 ・物師・物始・物故	事誤(謬)・事之案内・事之気色・事之最初・事難 ・事始・事之汎愛・事之非常・事之儲(事儲)
御堂関白記 物形・物上手・物音・物用・物由	事感・事興・事便宜・事用意
左経記 物枝・物実・物損・物體	事終始
中右記 物解状	事危・事恨・事之根元(事根元)・事妨・事成敗・ 事崇・事堪・事咎・事之外(事外)・事之濫悪
将門記 物情・物妨・物譏	

4. 1 まず、和文資料で複数作品に用いられ、和化漢文資料では一作品にのみ見られる連語について述べたい。

4. 1.1

物の心 次の諸作品に見られる。

ものゝ心もおぼしりたれば(宇津保藤原の君129-2) 是物の心知るまで見んとおぼえし也(落窪卷三192-3) のどかに物の心も聞き分くべき事なれば(源氏蛸虫195-6) ものの心を思ひしより(夜の寝覚卷四252-7) 姫君ものゝ心知るまで見ないては(浜松卷四353-5) やうやう物の心知り給まゝに(狭衣卷-31-9) ものゝ心知らせ給へる宮達は(栄花卷-46-1) ものゝこゝろしりたらん人は(大鏡卷五241-11) この命婦こそ物の心得てかどかどしくは侍る人なれ(紫式部日記241-2) 物の心知りげもなきあやしの童べまで(更級57-7) 始、物、心吉々知給サリケル時ヨリ、夜ハ静ニ心ヲ鎮メテ思ヲ不乱シテ(今昔卷-56-12)⁽⁷⁾

和化漢文資料には、「仍彼君案物情、貞盛寔ニ…(将門記16)」の一例しか見られない。

物の故 和文資料では、次の九作品に見える。

苦きまでおぼえければ、物のゆへしる友達のもとに(大和350-9) かの志賀に率て参りける友だちめきたるが、ものゝ故知りたるを、このおとと呼びにやりて(平中25-20) 物の故知りたる工匠二三人を賜はりて(源氏宿木293-4) ものゝゆへしりて思ひやりあり、親しうつかふまつるを、こゝにとゞめ給て(浜松中納言卷三277-14) ひとへに、物の故知らず、逸りありつかぬなめり(狭衣卷三235-15) ものゝ故・心も知らぬ者どもゝ(栄花卷二十九312-9) ものゝゆへしりたる人などもむげにちかくるよりて(大鏡卷二73-11) 我のみ世には物のゆゑ知り、心深き類はあらじ(紫式部日記214-6) 国ニ人多カリト云ヘドモ、物ノ故知タル人トハ、汝ヲナム見ル(今昔卷十六459-8)

一方、和化漢文資料には、「こゝは檀那院そ、下馬所そ、大臣公卿波物故は知良ぬ物かと云々(小右記^{皇和正}十四)」の一例のみである。

物の音 和文資料では八作品に見え、用例数も130例にのぼる。殊に宇津保物語では、物語の内容を反映するものごとく、最多の62例をかぞえる。

このものゝねをきゝめで(宇津保俊隆72-11) とりどりに物の音どもしらべ合せて遊び給ふ(源氏花宴318-9) おほのかなるものゝ音を、ゆるゝかにおもしろくかきならし(夜の寝覚卷-46-9) ものゝ音さへ世に知らず聞ゆるに(浜松中納言卷-160-1) さまざまの物の音ども

空に聞えて(狭衣卷-45-13) 中鳥のものゝ音など、もの通に聞ゆるに(采花卷十一-350-5)
ものゝ音調子ふきいづるほどに(大鏡卷四199-7) つねよりことにきこゆるもの。(中略) もの
の音はさらなり(枕冊子222-3)

和化漢文資料には、「此間奏楽、通夜物音不断、已曉了(御堂関白記寛弘四)」の一例のみである。

物の色 和文資料では、六作品に見られる。

ものゝいろ、しざまなど、なべてのものゝやうにもあらず、すぐれてめでたくしいで給へり(宇津保俊隆106-3) ほのかなる袖口裳の裾汗衫など、物の色いと清らにして(源氏葵328-11)
 雪消の光りあひて、物の色も人のかたちも、隈なくもてはやされ給へる(狭衣卷二175-14) さる折だに物の色・しざま心となる殿に(采花卷三十九513-11) なりあしく、ものゝ色よろしくてまじらはむは、いふかひなきことなり(枕冊子183-2) 赤色ノ重ノ唐衣・地摺ノ裳・濃キ袴也、物、色極テ清テ微妙シ(今昔卷二十四324-13)

和化漢文資料では、「及弁物色『之』剋、渡給右衛門佐輔公朝臣公…(小右記長和記)」の一例を見る。

以上すべて、物の色合いの意味に用いられており、次のごとき漢語を訓読みしたものに相当する。

「物色①謂物之色(礼月令) ②以下省略『辞海』中華書局版」

物の上手 前条と同じく、和文資料では次の六作品に見られる。

大将は、いつくよりかゝる子をたづねいで、世のものゝ上手おほしたて給らん(宇津保俊隆99-3) かかるいみじき物の上手の、心の限り思ひすまして静かに奏き給へるは(源氏絵合199-13) 道々のものゝ上手ども、少しもおしむ手なくつくして(浜松中納言卷-197-4) 内蔵の命婦、いつれの御前達の御折も、まづものゝ上手に仕うまつるに(采花卷二十五204-10) いみじからむものゝ上手不用なり(枕冊子335-14) 世ニ並ヒ无キ物ノ上手也ケリ(今昔卷十六459-1)

和化漢文資料では、「右兵衛尉多吉茂年七十余、當時物上手也(御堂関白記寛弘七)」の一例を見る。

物のはじめ 和文資料では、次の五作品に見える。

宮ものゝはじめなりとて、れいのごとくとりちらさせ給はず(宇津保藏開の上1042-3) げに今宵は三日の夜なりけるを、物のはじめに物あしう思ふらん(落窪卷-72-9) めでたくとも、物の初めの六位宿世よ(源氏少女332-3) ものゝ始めに、かく忌々しま事を嘆き侍る(狭衣卷二120-6) 宮の御前ゆゑしくあはれなる事に聞しめせど、ものゝはじめと忍ばせ給ふ(采花卷二十八284-6)

和化漢文資料では、「其次語除書聞蜈蚣事、会釈蜈蚣云、吳字者天載口、公字者三公也、出自天口可為三公歟、吳者期十二月可無疑、彼日甲子、物始被行除目、可謂事始也(小右記長和元)」の一例を見る。

物の聞え 和文資料では次の四作品に見える。

いとふびんなる事ものゝきこえ侍れ(宇津保園讀上1306-7) さすがに煩はしう物の聞えを思ひて、かく明かし給ふなめり(源氏行幸143-6) 物のきこえあらば、北のかたいたかにのたまはん(落窪卷-62-10) ものゝ聞え、いますこしわづらはしく、聞きぐるしかるべし(夜の寝覚卷-73-13)

和化漢文資料では、「為言合斯事来也者、縁可有物聞、不答左右(小右記長和元)」の一例を見る。

旧稿で⁽⁸⁾、「物の聞え」「事の聞え」の用法を和文資料によって比較した時、「物の聞え」には、すべて畏怖の感情が籠められているように察せられる旨を述べたのであるが、この小右記の例も例外ではないようである。即ち、「物聞」を怖れるが故に、「左右」の返事をしなかった、というように理解される。

物の枝 和文資料では、次の四作品に見られる。

箱に入給ても^{もの}の^枝につけて（竹取19ウ） 色紙一重につ^みて、物^の枝^ににつけて（落窪卷三179—14）（歌ヲ）も^のの^枝にゆひつけておきつ（源氏浮舟161—9） 雪いみじくふりても^のの^枝にふりか^りたるにつけて（和泉式部日記70—5）

和化漢文資料では、「又有撰殿御送物、^{付物枝}_{并局二正}不知何物（左経記^{皇仁三九}）」の一例を見るのみである。

物の香 和文資料では、次の三作品に見える。

たちさはぐ人、うちませたる花の事みゆ。かぜにきほひて、ち^のの^{もの}の^かまじりて、かく内ちかくたちよりてきくに（宇津保春日詣272—7） 君は、萬の物^の香^臭くにほひたるがわびしければ（落窪卷—100—1） 誠にあなめでたの、物^の香^や（源氏宿木323—13）

和化漢文資料では、「此兩三日所方有物^香、仍尋見之 処有犬死（曆殿^{天永三}）」を見るに過ぎない。

因みに、管見の限りでは、「物の香」の用例は、上に掲げたほかには、宇津保物語に二例（435—11, 1263—8）を見るに過ぎないので、もとより結論的には言えないが、これらの例を通じて、不快感を催す臭いを表わすのに用いられた例は、落窪物語の例を合せて二例である。特に、屍臭を表わす殿曆の例に注目される。⁽⁹⁾

物の用 和文資料では、次の三作品に見られる。

このわたりこそるのこの侍らんやうに、も^のの^{よう}にすべきもなく、（宇津保蔵開の上1028—3） ろなう物^の用^にすばかりの拍子などもとまらじとなむ覚え侍る（源氏橋姫37—10） 下藤なる身の、物^の用^多かるだに、名^の惜^しければ（狭衣卷三253—2）

和化漢文資料では、「従去六月十日 不雨下 七十余日、兩三度雖夕立、非可充物^用（御堂関白記^{皇仁三十四}）」を見る。

物の師 和文資料では、次の二作品に見る。

これらは、も^のの^し・まい人、こゑあり、かたちあるものゑらびたり（宇津保吹上上477—3） 物^の師^{ども}も殊^にすぐれたる限り双調吹きたてて（源氏胡蝶22—2）

和化漢文資料では、「先是給舞童祿、^皇物師等祿法有差（小右記^{皇和五}） 雖加禁制、物師等備装束於外廊（同上^{皇和二}）」を見るのみである。

4. 12

事の外 和文資料では15作品に見られるのに対して、和化漢文資料では、わずかに中右記に三例見出すのみであって、使用度に大差がある。

ちりつもる山もなにせん雲か^ること^のほ^かなるやどをうれしみ（宇津保楼の上の下1895—10） 先の方すこし重りて色づきたること、殊^の外^にうたてあり（源氏末摘花257—10） 気色ばみ、かよひあるまじきことは、こと^の外^にもてなしつれば（夜の寝覚卷二153—11） 世を殊^の外^におぼし澄みたるさまの（浜松中納言卷二226—12） なつかしく今めかしく見所ある筋は、こと^の外^に勝り給へり（狭衣卷—35—9） これはいとこと^のほ^かなる御有様なれば（栄花卷二93—13） このみやをこと^のほ^かにかなしうしたてまつらせたまうて（大鏡卷—54—15） かくこと^のほ^かなるをも知り給はで（蜻蛉日記中108—1） いと由なかりけるすずろ心にて、こと^の外^にたがひぬる

有様なりかし(更級日記45-5) 御胸のゆるぐさまぞ殊のほかに見えさせ給ふ(讃岐典侍日記120-13) 然レドモ君ト親ク成テ後ハ、事ノ外ニ思ヒ噺メル也(今昔卷十287-16) いかなる人ぞ事の外にしるし有ける人かな(金葉集卷九624詞書) たかさごのをのへにたてる鹿のねにことのほかにもぬるゝ袖かな(新古今集元久二年三月切出歌惠慶法師) ことのほかに多く出来たりにければ(古本説話集卷下198-1) 雨若宜者、今日必可遂由、有院宣、儲日六月十三日事之外遠故也者(中右記^{皇平三}) 御堅根今朝汗出漸減氣也、昨日一昨日事外苦御坐也(同上^{皇平三})

事の様 和文資料では、次の十作品に見られる。

としかげ、三年すみし山にいたりて、ことのさまをかたりて(宇津保俊隆23-11) この介にも、事のさまだにいひ知らせあへず(源氏玉鬘378-2) たが御ためにも、いみじく便なくも、見ぐるしくあることのさまかな(夜の寝覚卷-115-3) 雲霞とならせ給もげにいみじき事なれど、これは様かはりていみじき事の様なり(栄花卷二十五190-16) 年若からむ人、はた、さもえ書くまじきことのさまにやなどぞおぼゆる(枕冊子92-14) わが身いでずともありぬべかりける事のさまかな(讃岐典侍159-1) からうたに、「日をのぞめばみやことほし」などいふなることのさまをきよて(土左24-9) ことの様ばかり聞し召しつ(蜻蛉日記下219-7) 怪、事ノ様ヤ、人ヲ謀ルテモ、可云事ヲ申セ(今昔卷二十六424-12) さて、その日失せにけりとぞ。あはれなる事のさまなり(古本説話集卷上49-4)

和化漢文資料では、「年来腰病猶不快、仍為試事様所渡也(殿曆^{皇平九})」をはじめ三例が殿曆に見られるのみである。

こゝに付加しておくべき例がある。栄花物語には、「文臺・打敷などの有様も、さまざまの同じ事のやうなればなん(卷三十六444-8) 例の若き人は劣らじと挑み装束きたれど、同じ事のやうなればとどめつ(卷三十七482-2)」以上二例が存する。これはおそらく「事の様」を音読したものであろう。コトノサマとコトノヤウとの意義・用法上の違いは明らかでない。「事の有様」をコトノアルヤウとする宇津保物語・平中物語の例と同様のケースなのであろうか。

事の始め 和文資料では、次の五作品に見受ける。

おのれが子のかぎりを、事のはじめには、いかゞし侍らん(落窪卷四246-6) ことのはじめ細かに、さりとて、聞き給へるめれば(夜の寝覚卷二128-2) まして年頃おぼつかなくゆかしう、いかなりけむ、事のはじめにかと、仏にも、この事を定かに知らせ給へ、と念じつるしるしにや(源氏橋姫39-5) 事のはじめなればいまいましようおぼされて(栄花卷四148-11) 事のはじめにもり聞えむ、よしなれば、(讃岐典侍179-13)

和化漢文では、次の一資料に見るのみである。「其次語除書間蜈蚣事、会釈蜈蚣云、吳字者天載口、公事者三公也、出自天口可為三公歟、吳者期十二月可無疑、彼日甲子、物始被行除目、可謂事始也(小右記^{皇平二})」

なお、和化漢文資料には、「事之最初」が一例見えるが、これがどのように読まれたものなのか明らかでない。

今日事頗異例賀、事之最初、先有献物六十捧(小右記^{皇平二})

4. 2 次に、和化漢文資料では複数作品に見られ、和文資料では一作品にのみ見られる連語について述べて行きたい。たゞし、「物の～」には、該当する用例が見当たらないので、直ちに、「事の～」の例について述べる。

事理 和化漢文では、次の四資料に見える。

仰云、事理也者、左判籌(九条殿記^{天曆七}) 縁諒閨、御人袴腰多不染云々、事理不可然、上古例摺袴、何況不染腰哉(小右記^{皇平三}) 雖有先例、事理不可然(左経記^{皇元七}) 何況公卿為勅

使参太神宮時、尤可用有文帶也、此事理可然（中右記^{長和元}・三六）

一方、和文資料では、次の一例を見るのみである。「者ノ靈也ト云ヘドモ、事ノ理ヲモ不知テ、何テ此ハ云フ（今昔卷二十七481—7）」「事理」は、諸橋博士の『大漢和辞典』によると、韓非子・漢書などに用いられている漢語である。その語義は、「事のわけ、物事の道理」とある。古典文学大系本の今昔物語集には「事ノコトワリ」と訓んである。しかし、古記録等でも同様の訓読みをしたかどうかは必ずしも明らかでない。もし、逐字的に訳読したとすれば、今昔物語集の宣命書きの示すところからも、おそらく、コトノコトワリであったであろう。この連語が今昔物語集以外の仮名書き和文資料には全く姿を見せない理由については、少くとも、二つの場合の推測が可能であろう。即ち、一つには、仮にジリという音読みをしたのであれば、あるいは、字音語を避けて他の言い回しをしたのかもしれない、ということである。二つには、仮に、コトノコトワリと訓読されるのが普通であったとしても、日本語では、コトワリという語に、既にコト（事）の概念が包含されており、従って、ことさらにコトノコトワリと読むところに、何かなじめない感じを伴ったのではないか、ということである。

事定 和化漢文では、次の三資料に見える。

余着冠・直衣、於対南面有**事定**（殿曆^{長和元}・三七） 随国司申有**事定**也（小右記^{長和元}・三七） 次又有**事定**云々（左経記^{長和元}・三七）

一方、和文資料では、「弓箭・兵杖ヲ帶シタル者共数立テ、事ノ定メヲ為ルヲ、垣超シニ和ヲ聞ケバ（今昔卷二十七534—14）」を見るのみである。

事旨 和化漢文では、次の三資料に見える。

又不警蹕、**事旨**如初云々（九曆逸文^{長和元}・） 相府所談其旨巨多、然而**事旨**是也（小右記^{長和元}・） 右兵衛督申云、**事旨**問余詞（左経記^{長和元}・）

一方、和文資料では、「つぶさなる**事**の旨を、きこしめし申させ給はんや、よくさぶらはん（浜松中納言卷三269—13）」を見るのみである。これは、聖から尼君への会話文に用いられている。

事憚 前条に同じく、和化漢文では、次の三資料に見える。

有初奏之日幸禅院之事可有**事憚**之由從院被奏（小右記^{長和元}・三七） 任當職之後未有御前儀、重服之間非無**事憚**（左経記^{長和元}・） 件事今其憚不可候也、父子御間**事憚**不可候之由存候也（中右記^{長和元}・）

和文資料では、「御願ヒトツニ滅罪生善ノ御功德ニ候メレハ**事ノハ、カリヲサルヘキニモ候ハス**（法花百座981）」を見るのみである。

事忌 和化漢文では、次の二資料に見える。

齋院車依有**事忌**不借用齋宮祈之由（小右記^{長和元}・） 而彼日坎日也、非無**事忌**（左経記^{長和元}・三七）

和文資料では、「長恨歌・王昭君などやうの絵は、面白くあはれなれど、**事**のいみあるは、こたみは奉らじ（源氏絵合190—13）」を見るのみである。

事次第 前条同様、和化漢文では、次の二資料に見える。

余此間依服薬忌不候御前、候鬼間^{（間カ）}催**事次第**、主上着御直衣給（殿曆^{長和元}・三五） 已一點参内、乍一剋着平野社、其儀**事次第**如松尾（御堂関白記^{長和元}・）

和文資料では、「亦扇有リ、弁ノ手ヲ以、其ノ扇ニ**事次第**共被書付ヲリ（今昔卷二十七488—2）」を見るのみである。

事便 和化漢文では、次の二資料に見える。

而今度以御殿用南殿、仍有**事便**（殿曆^{長和元}・三四） 至女**事便**不知者、但日記後件宅仰刀禰等令守護（御堂関白記^{長和元}・三六）

和文資料では、「**事**の便を賜はせてはぐくみかへりみさせ給ふ程に（栄花卷十五452—5）」を見

るに過ぎない。

5. 以下には、両方の資料に共通して用いられ、且、いずれも一作品（一資料）にのみ見られる例を掲げる。一般に、稀少例の一致という事象は、その両作品に何らかの特殊の関係の存在を推測させる大切な手懸りとなる場合がある。尤も、小稿程度の調査範囲では、稀少例の一致共通という事象にも、余り大きな意味を持たせることは出来ないであろうが、しかもなお、一応の目処には成り得ることであろう。

5. 1

物の妨げ

返す返す口惜しく、物の妨げのやうに見奉り侍る（源氏浮舟103—2） 而將門独^{ハツ}跋^{フシ}扈^{フミ}於人^{ハカリテ}
 襄自然^ス為物^ヲ防^ム（將門記458）

「物ノ防」は「物ノ妨」の誤りであろう。

物のわづらひ

又、さるくすりえうずるきさきありともなくて、にはかにおやをすてゝわたらんに、すこし、ものゝわづらひある、ふけうになりなむ（宇津保内侍督806—7） 非无物煩者（九条殿記^{天保元}）

物の要

此レハ、物ノ要^ヲ充^テムガ^ガ為^ニ、態^ト取^テ罷^ル也（今昔卷十六450—11） 右近府生安春無所言直進庭前、見其気色似有物要、仍賜絹一疋（小右記^{長保元}三十九）

物ノ沙汰

郡司ガ宿^ニ宿^テ、可成^キ物ノ沙汰^ヲナドシテ（今昔卷二十四354—3） 預公物沙汰者也、亦無膂力氣、仍免遣訖者（小右記^{長和}三十一）

5. 2

事のあやまり

いささかの、事のあやまりもあらば、かろがろしき誘りをや負はん（源氏梅枝240—7） 依無事謬、亦所疑者但波奉親朝臣者天下虚定第一（小右記^{寛弘}八） 余一々披見、多有事誤（同上^{長徳}三）

事の気色

女君、この事の気色は皆見知り給ひてけり（源氏蜻蛉183—11） 予問於読勘文之宰相、道方、其答不分明、事之気色恐懼左府歟（小右記^{長和}三六）

事ノ縁

遥^ニ程^ヲ経^テ打忘^レタル時^ニ、事ノ縁有^ルニ依^テ、比叡ノ山^ニ登^ル（今昔卷十二179—6） 依有事縁也者、先以近衛官被御遣者也（小右記^{永観}二五）

今昔物語集では、卷六（97—10）、卷十二（179—6、181—7）、卷十三（219—3、236—2、246—12、247—4、259—4）、卷十四（294—9）、卷十五（350—1、365—7、387—7、408—9）、卷十七（542—7、570—1）、卷十九（121—9）、卷二十（200—6）、卷二十六（428—2）、卷二十七（500—8、515—11）、卷三十（227—8、233—11）、卷三十一（252—4）など、約23例をかぞえ、殆ど全卷に及ぶ。但し、卷三十の二例を除いて、他はすべて仏教説話に用いられていることが著しい。因みに、高山寺藏消息文範（鎌倉初期）に次の一例がある。「一両、弟子或訪^ト事縁^ヲ或^ク尋^ニ生土^ヲ（186）」

事ノ発

檢非遣使大夫、尉藤原忠親并右衛門志縣犬養為政等ヲ彼ノ国^ニ遣^シテ、事ノ発^ヲ勘^ヘ被問^ケルニ、致忠進^テ答^ニ落^ニケレバ（今昔卷二十三246—15） 事之起在彼女（左経記^{長元}四）

事ノ本

此ノ国ニハ事ノ本トシテ、守ノ下リ給フ坂向ヘニ、三年過タル舊酒ニ、胡桃ヲ濃ク摺入レテ、……守、其ノ酒ヲ食メ事定レル例也（今昔巻二十八120—6）南庭有闕諍事、禁中頗以物駮、被尋問事元之處、右近看督使與主殿寮下部、相論之間所出来也（中右記^{五三三}）なお、今昔物語集には、「本縁」なる熟語が約十例有り、古典文学大系本では、これをコトノモトと訓んである。参考までに、「本縁」の所在を列記しておく。巻六99—8・巻七154—15・巻十334—12・巻十三225—3・巻十四300—15・304—5・巻十六455—14・巻十七511—5・511—12。

第三節 訓点資料との比較

1. 訓点資料所用の例で、管見に入ったものを次に挙げる。但し、同一資料に同連語が二例以上ある場合は、一例のみを掲げる。

① 黙不^{モクシテ}屑^{ケス}ニ^{モノ、カズニセ}此事^{キジ}（文鏡秘府論天卷保延点三オ五、『平安時代の漢文訓読語につきての研究』築島裕・訓資33）

② 不^{モノ、カズニセ}屑^{ケス}資生^シ（東大藏惠果和尚碑文古点27, 訓資33）

③ 資生^シ（を）屑^{ケス}ニ^{モノ、カズニセ}（高山寺藏惠果和尚之碑文古点2ウ, 訓資35）

④ 若^ニ物^ノの直^ニに^{モノ、カズニセ}准^ズへば、處^ニに^{モノ、カズニセ}随^フ（ひ）て不定^{ナリ}なり（西大寺本金光明最勝王経古点、最研乾112—12）

⑤ 初^メ（め）には法身の〔之〕地^ニに居^{シテ}して、物^ノの有^ク苦^シ无^ク楽^シを見^{シテ}大悲心^{（を）}起^シ（し）たまふことを明^ス（法華経義疏方便品末, 点研訳文篇474—17）

⑥ 「故^{（に）}」（朱補）に預^{（ル）}メ物^ノの疑^{（ヒ）}（ひ）を制^ス〔也〕。（同上489—22）

⑦ 菩薩^{（し）}、隱没^{（し）}ぬ（る）トキ（に）は、物^ノの益^{（ク）}、寝^{（ク）}息^{（ミ）}ぬ（法華玄賛巻六, 点研訳文篇236—3）

⑧ 是^ノ時天地色ヲ^カ變^{（ス）}シ鳥獸鳴クコト哀^シシ、物^ノノ感^{（レ）}既^ニ然^{ナリ}。〔則〕人^ノ悲^シ、悉^{シツ}可^シ（興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点巻十, 慈研訳文篇370—3）

⑨ 但^{（シ）}物^ノ機^{（セ）}熟^{（セ）}未^{（ル）}ヲ以^{（テ）}テ^{（ヒ）}纏^{（ヒ）}ヲ^{（ノ）}〔之〕西^ニ致^ス。（同上巻六198—16）

⑩ 文^ニに就^{（キ）}て二^ト為^{（ス）}。第一^ニには正^{（シ）}ク答^{（ス）}。第二^ニには兩偈^{（を）}もて、物^ノの心^{（を）}聞き辨^{（イ）}イテ、仏^{（に）}後に自^{（ラ）}説^{（キ）}たまふことを明^{（ス）}。（法華経義疏序品末, 点研訳文篇410—5）

⑪ 所説^{（ズ）}必^{（ズ）}大^{（ナ）}らむ（と）いふことを表^{（ス）}。則^{（チ）}、物^ノの情^{（を）}驚^{（カ）}一^{（反）}駭^{（ト）}オドロカシテ、難^{（シ）}遭^{（フ）}の〔之〕想^{（を）}生^{（ゼ）}使^{（ム）}。〔同上406—19〕

⑫ 乃^{（シ）}天^ノ〔所以〕遣^{（ハ）}シ（テ）物^ノ主^ト為^{（ル）}所^{（一）}以^{（ナ）}リ〔也〕。（興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点巻五, 慈研訳文篇159—8）

⑬ 心^{（に）}に陪^{（フ）}一^{（遊）}を願^{（フ）}に、事[、]物^ノの議^{（に）}に拘^{（レ）}レタリ。（大唐西域記巻三, 点研訳文篇553—18）

⑭ 並^{（ビ）}に仏^{（ノ）}の自^{（ラ）}大乘^{（を）}を住^{（シ）}して、亦[、]物^ノの^{（大）}を與^{（フ）}と（と）いふことを積^{（成）}す。（法華経義疏方便品末, 点研訳文篇458—6）

⑮ 又^{（上）}に三業^{（を）}供養^{（を）}を明^{（ス）}すは、則^{（チ）}物^ノの〔之〕福^{（を）}を生^{（ズ）}るなり。（法華経義疏序品末, 点研訳文篇367—2）

⑯ 但^{（タ）}化^{（ス）}、物^ノの^{（外）}に超^{（エ）}たるが為^{（ニ）}に、故^{（レ）}神通^{（を）}を以^{（テ）}〔而〕寺^{（に）}に命^{（ツ）}ツケたり〔焉〕。（南海伝, 訓研306—5）

- ⑰ 心^{キツコ}殷に物の為に情切なり(神呪心経, 『国語学』33)
- ⑱ 内に此の二(を)具せるを以て外に能(く)物の為に法を説(き)たまふ〔也〕。(法華義疏方便品末, 点研訳文篇446-16)
- ⑲ 昔(は)「物の為に」(朱補)〔於〕之(を)『朱三』説(く)を謂(へり)。(法華義疏随喜功德品, 点研訳文篇508-20)
- ⑳ 一(は)〔者〕菩薩, 自(ら)勝法を得て楽(み)て物の為に説(く)。(法華義疏序品初, 点研訳文篇347-19)
- ㉑ 汝は事の近遠を憶すや。(小川本願経四分律古点乙卷, 訓資9・72-12)
- ㉒ 敢て事の實を陳ブ。(大唐西域記卷三, 点研訳文篇553-21)
- ㉓ 自(ら)惟一付〔す〕して, 〔而〕未有の事を知レリと言ふと雖も, 未(だ)事の證(證)有(り)と(せ)未。(法華義疏序品末, 点研訳文篇410-10)
- ㉔ 其(の)母先一身に, 事の因に願を發シク。(南海伝, 訓研259-3)
- ㉕ 昨, 事ノ隙ニ因(り)テ遂ニ参奉(スル)コト得タリ(興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点卷七, 慈研訳文篇243-1)
- ㉖ 願自在の故に, 種種の事の業皆成就すること得ルが如ク(西大寺本金光明最勝王経古点, 最研乾23-23)
- 以上は, モノノ〜・コトノ〜と訓まれたと考え得る例である。この外, 音読・訓読のいずれとも明らかでない例や, 先に訓読せられた連語と同じものが, 同資料の他の個所や, 他の資料では音読せられたと思しいものがある。いま, これらをも参考までに挙げておく。
- ⑳ 若使頓に制セば, 物情不^レ堪(ふ)マ。(白鶴美術館蔵大般涅槃集解卷十一-65, 訓資32)
- ㉑ 靈(ヲ)物表ニ粟(ケ)テ彩ヲ天中に亮ウスル者(ハ)(興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点卷九, 慈研訳文篇331-12)
- ㉒ 靈一怪多(し)と雖モ, 物一害(を)為サ不。(大唐西域記卷四, 点研訳文篇595-3)
- ㉓ 物一譏(し)て時に譏フ。(同上卷五610-10)
- ㉔ 王, 仙の至(る)ことを聞(き), 躬ヲ迎(へ)て慰メて曰(く), 大仙情を物一外に棲(ま)シメタリ。(同上卷五608-12)
- ㉕ 物輩喧張シテ我等恥辱セラレナム(興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点卷八, 慈研268-14)
- ㉖ 事一勢斯(の)若シ, 計(はか)ヲ將(イヅク)に安ヨリ出(づる)(大唐西域記卷五, 点研訳文篇635-1)
- ㉗ 事(の)縁有(る)を以(て)遠(く)餘国に至(り)ぬ。(高野山龍光院蔵妙法蓮花経卷六, 訓研151-4)
- ㉘ 事理〔於〕言象ニ絶(エ)タリト雖(モ)(興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点卷八, 慈研訳文篇268-8)
- ㉙ 復, 印を以て, 所建立の事相及(ひ)観所成等の曼荼羅の上を按(ツ)ぜよ。(甘露軍荼利菩薩供養念誦成就儀軌康和点, 訓資20)
- ㉚ 誰カ先ヅ〔ツ〕是の尼拘律樹ヲ〔を〕ハ見(む)。各(々)事跡を言(へ)。(大唐西域記卷七, 点研訳文篇642-3)
- ㉛ 故に此の法身に於て, 能ク如来の種種の事業を顕す。(西大寺本金光明最勝王経古点, 最研乾26-18)
- ㉜ 若(し)能ク受持セレは所作の事業, 成辯せ不^レといふこと無し。(神呪心経288, 『国語学』33)
- ㉝ 能(ク), 衆の事業を成し, (広島大学蔵八字文殊儀軌330, 訓資39)

④① 能(く)所求の事業を成満(せ)令(む), (聖語藏辨中邊論天曆点100, 訓資1)

④② 一切の灌頂を受(くる)こと得む力故(に), 事業に約し(て), 建立(スル)所の一切の曼荼羅を(甘露軍荼利菩薩供養念誦成就儀軌康和点, 訓資20)

④③ 世間(に)於て同衆生の種々(の)事業に處して〔而〕之(を)撰受す。(大東急記念文庫藏大日経義釈卷十三, 訓資23)

2. ①②③, モノ、カズ・モノカズについては, 既に, 第二節3. 1でも触れたところであるが, 和文・和化漢文・訓点各資料のいずれにも見受ける⁽¹⁰⁾. 但し, その用法においては, 訓点資料の例は, 和文資料および, 真福寺本将門記のそれと同じであり, 古記録のそれとは異なる.

⑥「物の疑」は, 和文資料には見られず, 和化漢文資料では, 次の一例を見るのみである。「上田祭日依有物疑, 占否(貞信公記^番)」

⑩⑪, 「物の心・物の情」は, 上述の如く和文・和化漢文の両資料にも見られたところである。「物情」は, 孟子・後漢書などに用いられている漢語である。(諸橋博士著『大漢和辞典巻七』)

⑬「物の議」は, 和文資料には見えず, 将門記に次の二例を見る.

若物議. 在遠近. 歟. (81) 恐有物議. 於後代. (380)

「物議」は, 南史謝幾卿伝・北史齊高祖紀などに用いられている(『大漢和辞典』). 『辞海』には, 「世人之議也」と説明があるところから思うに, 将門記の如き表記もあり得たのであろう.

⑳「事の実」は, 和文資料には見あたらず, 和化漢文資料に次の例を見る.

又彼夜候禁中, 及巳剋被退出云々, 事之実正夜中死去云々(小右記^番)

「事実」は, 史記莊子伝などにあり, その意は「即実事也」であることを知る。(『辞海』)

㉔「事(の)縁」は, 既に第二節5. 2で触れたごとく, 和文・和化漢文資料にも見られたところである. その節に, 仏教説話に多用せられていることを述べたが, ㉔の例も仏典である.

㉕「事理」については, 既に第二節4. 2で触れた. この場合, 今昔物語集の用例の如く, コトノコトワリと訓んだかは明らかでない. たゞ何れにせよ, 漢文乃至和化漢文および漢文訓読語脈に限って用いられたのではないと思われる. 「事理」は, 韓非子・漢書などに用いられている。(『大漢和辞典』)

第四節 単独使用・通用の別より見た分布

以上の各節で考察の結果, 連語によっては, 三種の資料に亘って用いられているもの, 二種の資料に用いられているもの, および, 一種の資料にのみ用いられているもののあることが明らかになったであろう. 今, それらの種類によって整理したものを掲げると次下の如くである. 概ね資料数の多い連語の順に配列し, 便宜上すべて平仮名で記す.

1. 和文・和化漢文・訓点資料に通用

ものゝこゝろ(物心・物情) ものゝかず(物数・物員) ことのえん(事縁) ことのことわり(事理)

2. 和文・訓点資料に通用

(なし)

3. 和化漢文・訓点資料に通用

ものゝうたがひ(物疑) ものゝそしり(物議・物譏) ことのじつ(事實・事之質)

4. 和文・和化漢文資料に通用

①ものゝけ (物気・物恠) ②ものゝぐ (物具) ③ものゝゆゑ (物故) ④ものゝね (物音)
 ⑤ものゝこゑ (物声・者声) ⑥ものゝいろ (物色) ⑦ものゝきよう (物興) ⑧ものゝじやう
 ず (物上手) ⑨ものゝな (物名) ⑩ものゝふし (物節) ⑪ものゝはじめ (物始) ⑫ものゝ
 えだ (物枝) ⑬ものゝかた・ものゝかたち (物形・物體) ⑭ものゝきこえ (物聞) ⑮ものゝ
 か (物香) ⑯ものゝよう (物用) ⑰ものゝし (物師) ⑱ものゝえう (物要) ⑲ものゝさた
 (物沙汰) ⑳ものゝさまたげ (物妨) ㉑ものゝわづらひ (物煩)

①ことのほか (事外) ②ことのついで (事之次・事次) ③ことのやう・ことのさま (事様)
 ④ことによし (事之由・事由) ⑤ことのありさま・ことのあるやう (事有様) ⑥ことのことろ
 (事心・事意・事情) ⑦ことのおもむき (事趣) ⑧ことのおつらひ (事煩) ⑨ことのはじめ
 (事始・事初) ⑩ことのさだめ (事定) ⑪ことのはゞかり (事憚) ⑫ことのむね (事旨)
 ⑬ことのおこり (事発・事起・事之起) ⑭ことのおしだい (事次第) ⑮
 ことのおたより (事便) ⑯ことのおやまり (事誤) ⑰ことのかぎり (事限) ⑱ことのおけしき
 (事気色) ㉑ことのもと (事本・事元・本縁)

5. 和文にのみ (所在を一資料につき一例ずつ記しておく.)

ものゝあはれ 大和250-5, 宇津保142-6, 源氏帚木43-6, 夜の寝覚61-11, 狭衣358-2,
 栄花(上)164-15, 枕冊子169-11, 土左五-2, 紫式部223-7, 後撰1272, 拾遺511, 新古今
 1805

ものゝさま 宇津保866-9, 源氏梅枝223-11, 夜の寝覚144-11, 栄花(上)44-15, 大鏡144
 -2, 枕冊子144-10, 堤中納言416-13

ものゝふ 平中31-2, 宇津保74-7, 源氏桐壺20-10, 古今序, 後拾遺1008, 新古今251

ものゝふた(蓋) 落窪71-2, 源氏蜻蛉205-14, 枕冊子180-9, 今昔卷十三266-16, 堤中納
 言398-7, 金葉集68

ものゝをり 大和349-1, 平中1-6, 源氏盤66-9, 狭衣456-8, 枕冊子100-5, 紫式部
 218-2

ものゝうしろ 源氏総角163-1, 夜の寝覚111-4, 浜松291-15, 枕冊子309-11, 堤中納言
 371-5

ものゝけしき 大和364-14, 平中29-1, 宇津保1576-11, 源氏浮舟145-1, 狭衣362-10

ものゝさとし 宇津保1440-4, 源氏薄雲246-1, 夜の寝覚50-9, 狭衣194-6, 栄花(上)
 98-3

ものゝたより 大和364-9, 平中16-10, 宇津保81-7, 源氏夕顔157-8, 堤中納言388-4

ものゝついで 宇津保1898-6, 源氏幻343-1, 夜の寝覚401-9, 枕冊子183-11, 蜻蛉22-
 13

ものゝはざま 宇津保1854-4, 源氏東屋69-10, 栄花(上)162-16, 大鏡245-1, 今昔卷十三
 221-6

ものゝおぼえ 宇津保1760-6, 夜の寝覚255-14, 栄花(上)195-5, 讃岐典侍144-11

ものゝかくれ 源氏柏木166-5, 浜松420-1, 栄花(上)393-3, 今昔卷二十七509-16

ものゝなか(中) 源氏玉鬘405-4, 栄花(上)413-2, 枕冊子354-4, 蜻蛉51-12

ものゝはえ(榮) 宇津保993-10, 源氏竹河420-10, 栄花(上)28-15, 大鏡265-5

ものゝあやめ 源氏夕顔108-14, 浜松287-12, 枕冊子310-15

ものゝかみ(上) 枕冊子311-8, 後撰1105, 法花百座765

ものゝきよら 宇津保773-5, 源氏檣柱183-3, 狭衣301-8

- ものゝくま (隈) 源氏明石79-11, 浜松367-1, 紫式部181-5
 ものゝそこ (底) 宇津保1084-2, 源氏浮舟152-7, 枕冊子149-5
 ものゝはぢ (恥) 宇津保1643-1, 狭衣69-12, 大鏡114-2
 ものゝひま (隙) 源氏手習250-4, 浜松406-16, 今昔卷三223-13
 ものゝひめぎみ 源氏若紫195-7, 夜の寝覚240-5, 紫式部119-4
 ものゝほど 源氏橋姫24-11, 紫式部169-2, 堤中納言394-5
 ものゝまぎれ (紛) 源氏乙女335-13, 浜松336-1, 栄花 (上) 261-12
 ものゝむくい 落窪165-14, 源氏明石62-14, 浜松268-7
 ものゝいのち (命) 今昔卷十六450-13, 法花百座278
 ものゝいろあひ (色合) 源氏関屋178-2, 紫式部195-5
 ものゝくさはひ (種) 落窪78-5, 源氏玉鬘398-4
 ものゝけはひ 源氏若菜下41-1, 大鏡84-8
 ものゝしらべ 宇津保585-8, 源氏若菜下39-5
 ものゝしる (物汁) 蜻蛉74-1, 今昔卷-77-2
 ものゝすぢ 宇津保1412-1, 源氏若菜上387-3
 ものゝそば 源氏野分120-5, 栄花 (上) 275-7
 ものゝたとひ (譬) 源氏総角128-6, 今昔卷五390-13
 ものゝつみ (罪) 宇津保1473-3, 源氏総角178-10
 ものゝは (葉) 宇津保73-10, 栄花 (下) 133-5
 ものゝへだて 源氏総角97-14, 栄花 (下) 164-3
 ものゝへんぐゑ 宇津保1886-7, 源氏夕顔124-6
 ものゝはづかしさ 源氏総角134-7, 浜松270-7
 ものゝやう (様) 宇津保106-3, 蜻蛉9-3
 ものゝゆかり 宇津保986-11, 浜松364-5
 ものゝれい (例) 宇津保1397-8, 枕冊子132-10
 ものゝゑやう (絵様) 源氏胡蝶20-13, 枕冊子208-4
 ものゝをりふし 宇津保49-7, 源氏柏木123-9
 ものゝあしおと 今昔卷二十七488-16
 ものゝあと (跡) 古本説話集186-1
 ものゝあな (穴) 夜の寝覚310-8
 ものゝあなた 源氏鈴虫207-8
 ものゝあやまち 源氏螢52-10
 ものゝありさま 源氏胡蝶35-14
 ものゝあるやう 大和361-5
 ものゝあんない 源氏藤袴173-1
 ものゝいとほしさ 枕冊子347-7
 ものゝいらへ 枕冊子164-1
 ものゝいろいろ 源氏御法301-5
 ものゝいんぐわ (因果) 栄花 (上) 277-15
 ものゝうへ (上) 宇津保947-8
 ものゝうらめしさ 夜の寝覚380-11
 ものゝおく (奥) 源氏椎本77-7
 ものゝおそろしさゆゝしさ 栄花 (下) 277-4

- ものゝおほきさ(大) 枕冊子130—2
 ものゝおほひ(覆) 源氏梅枝221—8
 ものゝおもしろさ 源氏若菜上348—12
 ものゝおもひいで(思出) 宇津保1702—2
 ものゝおや(親) 源氏常夏76—9
 ものゝおん(恩) 今昔卷二十七534—2
 ものゝかぎり 宇津保313—10
 ものゝかしら(頭) 大鏡274—16
 ものゝかたがた 紫式部225—11
 ものゝかため(固) 宇津保1499—3
 ものゝかなしさ 浜松364—7
 ものゝき(木) 浜松169—2
 ものゝくさ 源氏行幸133—11
 ものゝかたびら(帷子) 源氏帚木54—13
 ものゝくるしさ 宇津保318—10
 ものゝけじめ 紫式部194—7
 ものゝこゝろくるしさ 源氏若菜下76—2
 ものゝこゝろばへ 源氏空蟬98—7
 ものゝさき 蜻蛉202—2
 ものゝしし(肉) 古本説話集174—2
 ものゝしたかた(下形) 源氏梅枝231—9
 ものゝしふ(集) 栄花(下)44—1
 ものゝしもべ(下部) 枕冊子193—10
 ものゝしりへ(後) 蜻蛉225—13
 ものゝたがひめ(遊目) 源氏若菜上372—9
 ものゝたぐひ 浜松259—15
 ものゝたすけ 蜻蛉172—11
 ものゝたゝり(祟) 宇津保277—7
 ものゝたま(精) 今昔卷二十七485—10
 ものゝためし 源氏夕霧279—1
 ものゝつぎつぎ(次々) 宇津保72—10
 ものゝつたへつたへ(伝々) 源氏若菜下46—4
 ものゝつひえ(費) 宇津保163—3
 ものゝつみ(積) 落窪111—5
 ものゝて(手) 枕冊子85—2
 ものゝとゞこほり(滞) 源氏若菜下38—10
 ものゝなげかしさ 浜松435—15
 ものゝなさけ 源氏夕顔119—9
 ものゝねがら 源氏若菜下34—9
 ものゝはええしさ(榮) 源氏夕霧241—4
 ものゝはし(端) 源氏手習287—9
 ものゝひかり 宇津保858—11
 ものゝひまひま 紫式部230—6

- ものゝほしき(欲) 古本説話集174-8
 ものゝまかなひ 宇津保952-5(存疑)
 ものゝみやび 源氏若菜上308-8
 ものゝむすめ 源氏螢63-2
 ものゝめでたさ 枕冊子156-11
 ものゝゆくへ 浜松363-5
 ものゝよすが 紫式部197-4
 ものゝりやう(靈) 今昔卷二十七516-17
 ものゝわう(王) 今昔卷五383-4
 ものゝをかしさ 大鏡80-10
 ものゝをりをり(折々) 源氏末摘花232-1

 ことのきこえ 宇津保1534-10, 源氏賢木405-4, 浜松206-2, 栄花(上)174-14
 ことのさはふ(作法) 落窪224-4, 栄花(下)460-1, 大鏡197-3
 ことのすぢ 源氏常夏94-12, 枕冊子205-9, 蜻蛉41-4
 ことのまぎれ(紛) 源氏竹河386-12, 夜の寝覚75-9, 浜松207-1
 ことのをり(折) 宇津保1737-4, 源氏夕霧288-7, 古本説話集204-12
 ことのかず 後拾遺657, 千載727
 ことのさた(沙汰) 今昔卷十九134-16, 古本説話集214-13
 ことのたとひ(譬) 平中34-17, 源氏蜻蛉170-6
 ことのなか(中) 宇津保1603-11, 落窪197-3
 ことのふし(節) 夜の寝覚229-5, 更級52-2
 ことのあらそひ(諍) 今昔卷四312-15
 ことのいふかひ(言甲斐) 後撰1224
 ことのうらめしさ 源氏宿木251-6
 ことのおきて(掟) 栄花(下)27-4
 ことのコんげん(根元) 今昔卷五345-6
 ことのさまたげ 宇津保1501-10
 ことのさわぎ(騒) 源氏常夏85-8
 ことのしげさ(繁) 源氏総角172-5
 ことのだうり(道理) 宇津保1502-10
 ことのたがひめ(違目) 源氏薄雲253-11
 ことのとばかり 宇津保149-9
 ことのとつて 大和366-8
 ことのとが(咎) 狭衣43-3
 ことのとぢめ(閉目) 源氏幻325-1
 ことのなさけ 源氏深標141-10
 ことのはえ(榮) 栄花(上)51-11
 ことのはかさあささ(深淺) 源氏絵合201-10
 ことのみだれ 源氏薄雲250-4
 ことのむくい 浜松208-9
 ことのもよほし(催) 栄花(下)199-1
 ことのをりふし 今昔卷四278-1

6. 和化漢文資料にのみ (前項に準ずる)

- 物誤 九曆抄 (天曆三・正・二十三), 小右記 (正曆四・七・二十八)
 物危 九曆逸文 (天慶九・十・二十八)
 物勢 小右記 (長和三・二・二十)
 物解文 小右記 (長和三・二・二十)
 物実 左経記 (長和五・四・二十七)
 物損 左経記 (長元七・八・十二)
 物手本 殿曆 (康和五・十二・九)
 物由 御堂関白記 (寛弘元・九・十一)
 事危 中右記 (寛治八・十一・十一)
 事愁 (憂) 中右記 (寛治五・十二・二十九), 御堂関白記 (寛弘七・八・二十九)
 事之案内 小右記 (寛弘八・八・十八)
 事疑 小右記 (寛和元・三・二十七)
 事感 御堂関白記 (寛弘六・七・十一)
 事儀 御堂関白記 (寛弘六・十二・二)
 事興 御堂関白記 (寛弘三・八・二十三)
 事之最初 小右記 (永延二・十一・七)
 事障 御堂関白記 (長和元・十二・十一), 中右記 (嘉保二・九・七), 左経記 (寛仁四・七・二十二)
 事終始 左経記 (長和五・四・五)
 事之子細 殿曆 (康和五・三・九)
 事體 殿曆 (康和四・正・四), 中右記 (嘉保二・十・二十三), 左経記 (寛仁元・十・二十九)・事之體 中右記 (寛治八・五・二十)
 事難 小右記 (寛弘八・七・一)
 事後 殿曆 (天仁二・六・二十九)
 事之汎愛 小右記 (長和二・九・二十一)
 事之非常 小右記 (長和三・六・十六)
 事便宜 御堂関白記 (長和二・四・十三)
 事程 殿曆 (嘉承二・六・十八)
 事儲 小右記 (長和二・正・二)・事之儲 小右記 (天元五・三・三)
 事故 殿曆 (嘉承二・七・八), 小右記 (寛弘五・九・十一), 中右記 (元永二・七・十五), 御堂関白記 (長和二・二・二十三), 左経記 (長元元・二・二十一)・事之故 中右記 (元永元・八・二十二)
 事用意 御堂関白記 (長和二・十一・二十)
 事恐 (怖) 小右記 (長保元・七・二十三), 御堂関白記 (長和四・六・十九)

7. 訓点資料にのみ (第三節に掲げた用例の番号を用いる。)

- 物の直 ④, 物の有苦无楽 ⑤, 物の益 ⑦, 物の感 ⑧, 物の機 ⑨, 物ノ主 ⑫, 物の大 ⑭, 物の福 ⑮, 物の外 ⑯, 物の為 ⑰⑱⑲⑳
 事の近遠 ㉑, 事の證 ㉒, 事の因 ㉓, 事の隙 ㉔

8. 1 三種の資料に通用の四連語のうち, 「事縁」「事理」は, 和文資料では今昔物語にのみ見られるものである点で注目せられる。

8. 2 和文・和化漢文資料に通用の連語について見るのに, 「物の～」では, 22連語 (⑬を二連語と見る。)の内, 源氏物語に所用の連語が16 (①③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑭⑮⑯⑰⑱), 宇津保物

			宇
		今	6
	栄	6	8
源	7	5	12

〔表A〕

			宇
		今	5
	栄	5	4
源	6	5	5

〔表B〕

語15 (①②④⑤⑥⑦⑧⑩⑪⑬⑭⑮⑯⑰⑱), 今昔物語集9 (①②③⑤⑥⑧⑬⑱⑲), 栄花物語9 (①②③④⑥⑦⑧⑪⑬) (以下省略する.) という結果になる. しかも, 〔表A〕に見るごとく, 源氏物語と宇津保物語とに通用の連語は12箇にのぼり, 且, 栄花物語に所用の連語も, その殆どが源氏・宇津保の両作品所用の連語に包含せられていることを知る. この現象は, 源氏物語・宇津保物語におけるこの種連語の類似性と同時に, 両物語の語彙基盤の広さを示すものと思われる. なお, 「物ノ要」「物ノ沙汰」は, 今昔物語集のみの用例である.

また, 「事の～」では, 21連語 (③⑤は, それぞれ二連語とする.) のうち, 源氏物語に所用のものが10 (①②④⑤⑥⑧⑨⑬⑰⑱), 今昔物語集9 (①②④⑤⑥⑦⑩⑭⑮), 栄花物語9 (①②③④⑤⑦⑧⑨⑯), 宇津保物語6 (①②④⑤⑥⑱) (以下省略する.) という結果となっている. 「物の～」の場合に比べて, 源氏物語所用の連語の占める率 (「物の～」では全体の約73%, 「事の～」では約48%) および, 宇津保物語所用の連語の占める率 (「物の～」約68%, 「事の～」約29%) が共に低いことに注目せられる.

そして又, 〔表B〕によれば, 宇津保物語は, ほとんど源氏物語に一致する. 又, 今昔物語集・栄花物語所用の連語も, 源氏物語所用の連語が少ないため, 「物の～」の場合よりも, 一致率は遥かに高くなっている. 特に宇津保物語との親近性には注目せられる. なお, 「事ノ発り」「事ノ定」「事ノ次第」は, 今昔物語集のみの用例である.

以上を要するに, 和文・和化漢文資料通用の連語に関しては, 源氏物語の語彙基盤の広さを知ると共に, 「物の～」と「事の～」とで, 分布状態に異りが見られることが明らかになったであろう.

8. 3 和文資料にのみ見られる連語の異語数を表にまとめると次のごとくである.

	「物の～」 異語数	比率(%)	「事の～」 異語数	比率(%)
源氏物語	60	52.2	13	40.6
宇津保物語	32	27.8	6	18.8
浜松中納言物語	14	12.2	3	9.4
落窪物語	5	4.3	2	6.3
夜の寝覚	9	7.8	2	6.3
栄花物語	15	13.0	5	15.6
今昔物語集	11	9.6	5	15.6
枕冊子	18	15.7	1	3.1
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
合計	115	...	32	...

前項(8.2)の「物の～」で指摘した宇津保物語と源氏物語との近似性は, こゝでは影をひそめている. 栄花物語・今昔物語集もまた, 源氏物語に比べて著しく低率である. かくて, いわば和文資料特有のこの種連語の世界では, 源氏物語が他を圧していることを知るのである.

「事の～」でも, やはり源氏物語が高率を維持しているとはいうものの, 宇津保物語と同

様, 「物の～」よりも低率になっており, この点で, 前項で述べたところとはほぼ同様の傾向を示している. それに反して, 今昔物語集は, 「物の～」の場合よりもはるかに高率を示していることが目を引く. 栄花物語・今昔物語集・落窪物語を除けば, 概して, 「事の～」よりも「物の～」の方が使用率が高く, 単に比率のみからすれば, 和文資料特有の連語では, 「物の～」の方が優勢だということになる.

第五節 補説

本節では、上に述べてきた内容に関して、若干の補足説明を試みようと思う。

1. 稀少連語について

厳密な意味で稀少連語と言ってはいけないのかもしれないが、ともかく管見の範囲で、その用例の極めて少ない二三の連語について、次下に考察を試みたい。これらは、方言分派に喩えていうならば、「語詞現象の言語島」⁽¹¹⁾に相当するものではないかと思われる節がある。

ものの命 この連語は、今昔物語集に二例、法花百座に二例を見るのみである。

蛇持ノ云ク、「観音ト申セドモ人ヲモ利益シ給フ、要ノ有レバ取テ行ク也。必ス者ノ命ヲ殺サムト不思フモ……」(巻十六450—13) 我レ、今日ヨリ後、永ク此生贖ヲ不得、物ノ命ヲ不殺サ。(巻二十六430—5) アケクレハモノノ命ヲノミコロス(53) イロクツヲスクヒテモノノイノチヲコロサムカタメニ(278)

この連語は、古記録類や訓点資料にも見られない。因みに、室物集(九冊本、古典文庫刊)には約八例を見出すことができる。二三を引用しておく。

第一に不殺生と申は、ものゝいのちをたゞぬ事(247—5) かく我命をうしなへども、ものゝ命をばころし侍らぬなり(249—7) ちくしやうすら、物のいのちの死するをば、あはれむことにてぞ侍るめれ(251—4)

主として仏教説話に用いられた連語であったのかも知れない。

物の色合ひ この連語は、源氏物語と紫式部日記とのみに見られる。

この御局の袖口、大方のけはひ今めかしう、同じ物の色合かさなりなれど、物より殊に花やかなり(源氏楨柱205—7) 中中、ゆゑゆゑしく心あるさまして、物の色合・色沢などいとすぐれたり(紫式部日記195—5)

ところで、少数資料に用いられている連語で、源氏物語・紫式部日記の両方に用いられているものが幾つかある。即ち、「物の隈」は、源氏物語・紫式部日記・浜松中納言物語に、「物の姫君」は、源氏物語・紫式部日記・夜の寝覚に、「物の程」は、源氏物語・紫式部日記・堤中納言物語にという分布を示しており、いずれも、管見の限りでは、他に所用作品を見ない。中でも、「物の姫君」は、故池田亀鑑博士が「『絵にかきたる』『物語に見えたる』等の言ひ方は、紫式部によって、屢々用ゐられたが、これ等の物語的とか・絵画的とかの概念は、この世ならぬ・空想的なる等の意味である。と同時に、理想的なる、純粋なる・美的なるの意味でもある。かうして、美の内実は、著しく写実から離れて、幻想的になった。『ものの姫君』といふのは、理想化せられた、観念の世界に於ける姫君の意である。」(『平安時代文学概説』126～127)と説かれたところであって、おそらく紫式部の造語と見てよいのであろう。その影響を夜の寝覚が受けたという推測も強ち無稽とは言ひ切れないであろう。その他、上にあげた二三についても、紫式部と結びつける可能性が有りそうに思われる。

事の紛れ 源氏物語・夜の寝覚・浜松中納言物語に見えるのみである。上述した如き源氏物語と結びつく特殊な分布があるのかも知れない。

心よりほかにながらへて、思はずなる、事の紛れつゆにてもあらば(源氏権本68—4) かりにても、かゝる事のまぎれありて、いとかくものを思はせ奉る(夜の寝覚巻—75—9) ゆくへも知らず思ひなしてんも、いみじう悲しう、さりとて事のまぎれあるやうにもあらぬありさまを、この世にとゞめおきても(浜松巻—207—1)

事のかず 後拾遺集に一例、千載集に二例を見る。

こひしなんいのちはことのかずならでつれなきひとのはてぞゆかしき(後拾遺657) おとにの

みきゝしはことのかずならで名よりもたかきぬのびきのたき(千載1037) なれてのちつらからま
しにくらぶればなき名はことの数ならぬかな(千載727)

資料を通じて、「事の数」は、この三例のみのようである。既に述べた如く、落窪・源氏・栄花の各物語に「物のかず」があり、小右記・御堂関白記・左経記・将門記にも「物数(員)」を見、訓点資料では、「屑」をモノノカズまたはモノカズと訓読した例を見たのであるが、「事のかず」は見当らない。平安時代としては、「物のかず」と「事のかず」とに分布の違いがあったと見てよからうか。

因みに、平家物語(日本古典文学大系)では、次の例を始めとして「事の数」が用いられている。「物の数」は見当らない。

事のかずにもあらざりけり(上106-16) 況や師高な(ン)どは事の数にやはあるべきに(上129-6) 成親卿が謀反は事の数にもあらず(上171-12) 小稿では、これ以上に触れない。

2. 今昔物語集の特殊性

今昔物語集所用の「物の～」「事の～」には、他の和文資料のそれと異なる点が種々存し、和化漢文資料との間に親近性の認められる場合が多い。個々には、上に触れたところであるが、こゝで纏めて考察しておきたい。

連語の後項を、1)作用性体言、2)状態性体言、3)其他の体言に分類してみると、今昔物語集の場合は、次のことが明らかになる。即ち、1)作用性体言より成るものは、「物の隠れ・物のたとひ・事の諍ひ・事の発・事の趣・事の理・事の定め」の七例で、殊に、「物の～」では僅かに二例に過ぎない。源氏物語に照せば、その相違は瞭然としている。また、2)状態性体言より成るものとは、たとえば、「物のいとほしさ・物の大きさ・物のをかしさ・事の恨めしさ・事の繁さ」などを言うのであるが、これらの後項を有する連語は、今昔物語集には全く見られない。且、他の和文資料所用の、状態性体言を後項とする連語の多くが精神作用を表わすものであることから、この種連語に欠けていることは、今昔物語集の語彙の一特徴と言えよう。また、そこに、女流仮名文学とは異なる説話の世界があると言えるのかも知れない。次に、3)其他の体言では、漢語を取上げねばならない。一体、今昔物語集にのみ見られる「物の要・物の恩・物の沙汰・物の精・物の靈・物の王」などの連語の中、「物の精」をモノノタマと訓む日本古典文学大系本に従うとしても、他はすべて漢語を後項とする連語である。因みに、他の和文資料で単独用例の中、後項が漢語であるものは、「物の案内」(源氏物語)、「物の集・物の因果」(栄花物語)、「物のあるやう」(大和物語)、「物のやう」(蜻蛉日記)などに過ぎない。作品の量的大小を考慮に入れても、なお今昔物語集に漢語を後項とする「物の～」の多いことは著しい。

この点は、「事の～」にあっても同様である。他の和文資料単独用例で漢語を後項とするものは、「事の気色」(源氏物語)、「事の道理」(宇津保物語)などが散見するに過ぎない。それに比して、今昔物語集では、「事の縁・事の根元・事の次第」などを数えることができる。

3. 和化漢文資料の場合

精神作用語を後項とする連語の少ない点では、和化漢文資料においても、ほぼ同様である。それに該当するものは、一応、「物危・物疑・物興・物煩・事危・事疑・事忌・事憂(愁)・事恐(怖)・事興・事憚・事煩」を挙げることができるようであるが、一々の検討を要しよう。

御輿出自伴門、升降之間、雖有物危、親衛之職、何雖須臾、遠離御輿哉(九曆逸文^{天保九}・三十八) 以後納置内膳御戸宅内、是有事危之上、依無神殿也者(中右記^{寛治八}・一) 依有事疑使官人等搜檢宅内(小右記^{寛和元}・七) 申文・勘文已勘合、可無事疑(同上^{長和元}・三) 諸牧御馬牽進之日更有被給彼解文也、往還之間光景已暮、非无物煩者、御覽之後、若有可被給之気色、須奏聞此趣(九条殿記^{天保九}・三) このほか、「事煩」は第二節3.2に用例を掲げたので、こゝには重ねて引かない。以上は、いずれも、何らか客観的事態を表わす語として用いられている。

次に、「物疑」(第三節2.)・「事憚」「事忌」(第二節4.2)は、既に用例を引いたので、こゝには省略するが、これらは、当時の社会通念として忌避すべき、乃至は従うべきとされていた習慣や事情を背景に持つ連語である。

有信息給新一、但依有事憂下藤給料等献申文(中右記^{長保五・三十九}) 今年有旱損之内、宇佐使・被使等数下向、為路次国有事愁歎(御堂関白記^{長和五・十二}) これらの「憂・愁」は訴えの意味である。

次に、「物興」は、第二節3.1に引例したところであるが、いずれも、宮廷の行事乃至は催し物の名称として用いられている。

以上いずれも、精神作用それ自体を表わしているとは言い難い。以下に掲げる和文資料の例と対照すれば明らかであろう。

このふみは、のたまひつる人に見せてまつれど、御かへりもなからむれば、まろをいかににくしとおもほさん。ものゝくるしきは、君のおはせぬころなむ思しりぬる(宇津保嵯峨院319-8) 古への心の残りてこそ斯くまでも参り来たるなれば、物の心苦しさをえ見過ぐさで、遂にあらはれぬること(源氏若菜下76-2) いひ知らずかしづく、物の姫君も、すこし世の常の人げ近く、親兄などいひつゝ、人のたたずまひをも見馴れ給へるは、物の恥かしさもなのめにやあらむ(源氏総角134-7) ものゝおかしさをぞ、え念ぜさせ給はざりける(大鏡卷二80-10) さきざきの宮々の御時の御祈どもものまゝにせさせ給。この度はものゝ恐しさゆゝしきそひておぼさるれば、いとゞ事まさり、よろづにせさせ給ふ(栄花卷二十八277-4) 朝夕に見たてまつり、うちかたらひつゝ、ものゝ歎かしきもつれづれもこよなくなぐさまれまし(浜松中納言卷五435-15) 夜も唯懐にのみ寝たまふを、あはれにかなしともてあそぶにぞ、物の悲しさも、ゆくへなき心ちする身のありさまも、こよなくなぐさめられて(同上卷四364-7) 心のひまなきは、げに物のうらめしさも、あはれも、おぼろけならでは心もとまるべからず(夜の寝覚卷五380-11) なほ罪はおそろしけれど、ものゝめでたさはやむまじ(枕冊子156-11) さて、物の欲しさも失せぬ(古本説話集174-8) 又二つなくてさるべきものに思ひならひたるただ人の中こそ、かやうなる、事の恨めしさなども、見る人苦しくはあれ(源氏宿木251-6)

和化漢文資料に、精神作用それ自体を表わす「物～」「事～」の例を求めるとすれば、次のようなものに限られてくるようである。

内裏焼亡可有事怖、不可被免由定申了(小右記^{長保元・三十三}) 使少納言庶政、件贈位是從冷泉院御時邪氣也。当時雖無指事、依有事恐贈之(御堂関白記^{長和四・十九}) 上達部十四所、事興無極、左右兵衛佐等進夾名(同上^{寛弘三・三十三})

4. 古辞書類には、次の如き例が見られる。

毛乃々阿美乎(享和本九オ) 天治本は毛乃阿美乎 毛乃々加比(天治本卷十・十八ウ) 毛乃々比太(同上卷四・三ウ) 一以上、新撰字鏡

毛乃々可比乎(上序・下二二・下二六) 一日本靈異記訓注⁽¹²⁾

徽モノ、シヒタ(色葉字類抄、前田本下103オ)

屑牛ノカ爪(法下) 繆モノ、カハハク(僧中) 條戈ノカミヲオホウ(仏上) 一以上、類聚名義抄観智院本

條牛ノアミヲ 價牛ノカク 債モノ、カヒー以上、類聚名義抄高山寺本

なお、「事の～」は見当らない。

む す び

1. 「物の～」「事の～」は、和文資料に限らず、和化漢文および訓点資料にも用いられている。しかし、上記三種の資料に通用の連語も少数ながら存しはするが、各種資料間の通用連語としては、和文・訓点資料間には全く見当らず、和化漢文・訓点資料間にも僅かしか見られない。一方、和文・和化漢文資料間には、多数の通用連語が存することは、前節までに述べたところである。尤も、これは、管見の訓点資料が僅少であることも与っているのであろうが、やはり、訓点資料の言語の特異性に因るところが大きいのであらうと思われる。

2. 和文・和化漢文に限って考察してみた結果は、概して、和文資料に「物の～」が、和化漢文資料に「事の～」の豊富なことが明らかであった。また、それぞれの資料単独用例について見ると、和文資料の「物の～」が著しく多いことに気付く。これは、観点をかえれば、「物の～」という連語を造成する力が、殊に和文においては著しいものがあると言えるであろう。ただし、今昔物語集については、既に先学によって色々な角度から言及されているごとく、今回の調査においても所謂かな書き和文とは異相のあることがほぼ明らかになった。また、古本説話集・打聞集・法華百座についても同様の傾向があらうかと思われるが、用例が少ないので、ここでは明らかでない。

3. ところで、小稿に取扱った連語は、文法論に所謂「詞」に属するものであり、資料の素材的内容に関わるところが多いと考えられる。従って、単に或語が一方の資料には有るが他の資料には無いというような単純平面的な比較は、余り意味を持たないと言えるであろう。ただ、素材的内容の選択決定は、表現主体の主体的行為に係っており、故に、同じく古記録とは言っても、資料によっては、著しい語彙的特徴の指摘されることのあるのは当然であろう。たとえば、小右記に所用の「物～」が他の和化漢文資料に比べて豊富であること（別表Ⅲ参照。16種を数える。しかし、これは初めに断ったとおり、既刊三冊分の集計であるから、更に幾らかの増加が見込まれる。確定的な資料では、御堂関白記11、左経記10、中右記7である。）や、中右記に所用の「事障」が24例という抜群の数値を示すこと（他は、御堂関白記・左経記に各一例ずつ）などを挙げるができる。

また、小稿の連語には含まれなかったが、「物忌」なる語は、御堂関白記には頻出するにも拘らず、それと同時代の小右記や、院政頃の中右記には、殆ど用いられていないという事実が存する。このような事実には、如何様の意味を付与すべきであるかは、実に容易ならぬ問題であろう。

4. 「物の～」 「事の～」の後項には、上述の如く、漢語がかなり含まれているが、そのみならず、元来、漢語であることの明らかな、「物」「事」を前項とする熟合語をも、日本語の造語形式に当てはめて、モノノ～・コトノ～と訓読せられた例が見られた。訓点資料が必ずしも、これらの熟合語をすべて音読みしたのではないということに注目を要しよう。この事実は、「宝字がくる熟語はそのまゝ字音語とならなかった」という中田祝夫博士の高説⁽¹³⁾を想起せしめるものがある。たゞ、小稿に取りあげた訓点資料が、すべて仏書ばかりであり、漢籍については、全く調査の手が及んでいないのであるから、これを以て、すべての訓点資料を押し量ることは慎まねばならない。

稿を終えるに当たり、一々芳名を掲げなかった『訓点語と訓点資料』関係の先学に衷心より御礼申し上げ、併せて大方の御叱正を御願い申し上げる次第である。

(注)

- (1) 山田忠雄「誤用・稀用・奇例の処理—今昔物語集の語法研究のために—」（『国文学解釈と鑑賞』昭38・6所収）
- (2) 『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究 研究篇』310ページ。
- (3) 広島大学大学院、昭和39年度国語学演習ノートによる。
- (4) 各種索引類から蒙る恩恵は量りしれないものがあるが、この度の調査では、公刊せられている総索引の中には、必ずしも有効でないものもいくつかあった。なお『古本説話集総索引』（山田洋一郎・風間書房）。

- 『平中物語総索引』(山田巖・洛文社)は、既に調査の終了後に刊行せられたため、今回は直接の学恩を蒙らないこととなった。一言申し添えておく次第である。
- (5) 「宇津保物語三」(日本古典文学大系)459ページ校異14参照。
 - (6) 「古典語『物の聞え』『事の聞え』などについて」(『国語教育研究』15号所収。)
 - (7) 今昔物語集には、モノノコ、ロでも次のような用例が約七例ある。これは勿論上に引いた例とは意義を異にする。汝ハ、心疎ク、人ニモ非リケル者ノ心カナ(今昔巻二十四 347-16)
 - (8) 注⑥に同じ。
 - (9) 「香」のかような例は今昔物語集にも在り、異とするに足りないが、参考までに触れておく。
 - (10) 山口佳紀「^{研究}惠果和尚之碑文古点一解読文と調査報告一」(訓資33輯所収)・同「高山寺藏惠果和尚之碑文古点」(訓資35輯所収)参照。
 - (11) 藤原与一「方言学」(昭37・6・三省堂)419~20ページ参照。
 - (12) 小泉 道「日本靈異記諸本訓積索引」(訓資37輯)による。
 - (13) 点研総論篇953ページ。

(昭和44年 9 月 30 日 受理)

(別表 II)

事の～	伊勢物語	大和物語	平中物語	竹取物語	宇津保物語	落窪物語	源氏物語	夜の寝覚	浜松中納言物語	狭衣物語	栄花物語	大鏡	枕冊子	土左日記	蜻蛉日記	和泉式部日記	紫式部日記	更級日記	讃岐典侍日記	堤中納言物語	古今和歌集	後撰和歌集	拾遺和歌集	後拾遺和歌集	金葉和歌集	詞花和歌集	千載和歌集	新古今和歌集	今昔物語集	古本説話集	百座法談聞書抄	打聞集	作品数	
あやまり							1																											1
あらそひ														1														1						1
有様					1		4			1	4						2										40				1		7	
あるやう			1		1																												2	
言ふ甲斐																						1歌											1	
いみ(忌)							1																										1	
恨めしさ							1																										1	
縁掟											1																23						1	
おこり趣											1						1										1						1	
限りずえ色					1						1																	1					3	
限か聞気					1		7	2	2													1歌											1	
心	1				1		13						1			1				2序							1			2		7		
ことり元																											1						1	
根沙定作											1	2															1						1	
作さ妨騒					3		12	6		4	2	1	1				1										1	2					10	
繁次筋					2			1																									1	
道がひめ							8					1	1																				3	
たがひり					1		3																										1	
壁ばかり			2				1																										2	
たよりで					1						1																						1	
つついで	1				9		18				1			1						1	1詞						1					8		
ついで	1																																1	
答ちめ								1																										1
閉中					1	1																												2
なさけえ							1																											1
は始り							1	1	1		4								1														5	
は深さ																																1		1
ふし							1										1																2	
ほまぎ					2		10	4	2	19	12	21		1		1	4					1詞		1歌			12	3				14		
乱れ							3	2	1																								3	
報いね							4																										1	
むね									1																								1	
もと																												10					1	
もよほ(様)											1																						1	
やう由											2																						1	
煩ひ							9	1			7			1														7					5	
折節								1			1																						2	
折節					1		2																										3	
異語数	1	2	2	0	14	3	24	5	5	3	15	2	2	2	5	0	1	2	5	1	1	2	0	1	1	0	1	1	17	4	1	2	124	

(別表 III)

資料		貞 信 公 記	殿 曆	九 曆	小 右 記	中 右 記	御 堂 関 白 記	左 経 記	将 門 記	資 料 数
物	危			1						1
物	誤			2	1					2
物	勢				1					1
物	色				1					1
物	疑	1								1
物	要				1					1
物	枝						1			1
物	香		1							1
物	数				1	4	1	1	1	5
						1		2		
物	形						1			2
								1		
物	體				1			1		1
物	聞				1					2
物	興				1	1				5
物	具		17		2	65	2	1		7
物	の		1							7
		1	19			5		4		
物	気	8		3	4	2	3			1
物	状					1				1
物	文				1					1
物	情							1		1
物	声					1	2	1		4
		1								
物	沙				1					1
物	妨							1		1
物	師				2					1
物	寶							3		1
物	手						1			1
物	議							2		1
物	損							1		1
物	本		1							1
物	名		2	4	2		2	1		5
物	音						1			1
物	始				1					1
物	節	2		4	9		2	4		5
物	故				1					1
物	用						1			1
物	由						1			1
物	煩			1						1
異	語	3	6	6	16	6	11	10	4	62

〔別表 IV〕

資料 連語	貞 信 公 記	殿 曆	九 曆	小 右 記	中 右 記	御 堂 闕 白 記	左 經 記	將 門 記	資 料 数
事					1				1
{事				1					1
事				5					1
事						1	1		2
事				1					1
事				1			3		2
事			7	6	7		3		4
{事					1				2
事						2			2
事				3	1				2
{事							1		2
事					1				2
{事					1	2			3
事		11	3	3	5		2		5
事					1				1
事						1			1
事						1	1		2
事						1			1
事				1					1
{事							2		3
事							1		3
事			4		3		1		4
事			1	5	2		3		4
{事					1				1
事					1				1
事				1					1
事		1		2			1		3
事		3							1
事					24	1	1		3
事					1				1
事		1		1					2
事								1	1
事		2				1			2
{事				1					2
事							1		2
事					1				1
{事					5				3
事		2			7		1		3
事					1				1
事		1				1			2
{事					1		1		6
事		4	3	4	3	2			1
事					1				1
事				2					1
事		1							1
{事				1					2
事		5							2
事				2	1		8		3
事				1					1
事				2					1
事						1			1
{事					1				1
事					2				1
事		1							1
{事				1					1
事				3					1
事			1	3			1		3
事					2				1
{事					1				5
事		2		4	2	1	1		5
事						1			1
{事							6		8
事	6	83	26	123	388	50	146	4	8
事					1				1
事			2	3	1	1	8		5
異語数	1	13	8	23	27	15	19	1	107